

---

# 魔法先生ネギま ~ 悪の正義 ~

unlimited

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま〜悪の正義〜

### 【Nコード】

N1113Y

### 【作者名】

unlimited

### 【あらすじ】

『正義』に絶望した少年は決意した。少年は自らの理想、自らの願いの成就のため『悪』である事を選ぶ。

オリ主チート原作&原作キャラブレイク一部アンチです。

苦手な方はお戻りください。

プロローグ

プロローグ

SIDE とある夜のある少年の決意

『正義』だと・・・？

こんなものが『正義』だと言うのか

こんな、何の罪も無い人々を悪に仕立て上げ

力無き弱者を征服し

蹂躪し

略奪し

殺戮する

こんなことが『正義』だと言うのか

赦さない

『正義』という名を免罪符としてを掲げる外道が

『正義』を掲げるものよ、聞け

我はこれより貴様らの敵、即ち『悪』となるう

我は今宵、この時をもって

『この世全ての悪』となるう。

## プロローグ（後書き）

ちよつと色々改変しました。ごめんなさい。

基本的に作者の妄想及び自己満足で話が進んでいきますのでご了承ください。

## キャラ設定1

ルクス・アヴェスター

年齢数えで10歳

本作の主人公。

生まれつき膨大な魔力を持っていたが人形遣いとしての魔法以外殆ど使えず、物心ついた時から家にあつた出所不明の異世界の魔導書で魔術について学ぶ。魔法が使えないことに劣等感は無く、むしろ独学で覚えた自己流魔術しか使えない自分をもはや魔法使いだとは思っていない。

性格は温厚でお人よし、たまに空気が読めないことがある。だが裏では冷徹で残酷なところもある。

容姿は同年代のネギよりやや小柄で中性的な顔立ち。やや長めの茶髪と、翡翠色の瞳。ただし魔術使用時に一時的に銀髪、琥珀色の瞳になる。

趣味特技は器用な指先と独特な魔術センスを活かした魔法道具及び自動人形の作成。

作成した魔法道具は一部だがまほネットで通信販売している。

なお6年前にある事件に巻き込まれ両親と姉を亡くす。

備考

会話の上ではポケ3割ツッコミ7割。(自称)

今現在主に使用する魔術例

ガンド本来は対象を人差し指で指差し、呪うことで体調を崩させる、というもの。だがそのフォームゆえ「ガンド撃ち」と呼ばれる。本

来は呪詛の様な物だが、魔力を収束させることにより物理的破壊力を持たせる事が可能。

#### 強化魔術

物質及び肉体の強化が可能。ただし肉体強化は自身のみ可能。

#### 投影魔術

魔力を用いて物質を作り出す。ただし生物は作れない。

#### 魔眼変化

自らの眼を魔眼に変化させる。基本的にどんな魔眼にでも変化させられるが高位になるにつれ効果時間と

肉体的負担が大きくなる。専ら使用するのは術式解析（魔力による結界呪詛のつくりを目視によって解析する）、霊視等である。

#### 概念付与魔術

既存の物質や投影で作り出した物質に概念を持たせる。

#### 魂の分割化

人型をしたものに自らの魂の一部を付与し、自らの自由もしくは自動で動く自動人形オートマトン

とする。人形が活動不能時には分割した魂は持ち主の下に自動的に戻る。

#### 降霊魔術

あらゆる時代から靈魂を召喚し、任意の対象に降ろす魔術。傀儡とする際には人格等が邪魔になる可能性があるので基本的に降ろした霊のスキルと能力のみ上乘せされる。

#### 転送魔術

予めそれ用の刻印を刻んだ物質を任意の場所へと転送する。生物の場合はその固体が一度でも行った場所に限り可能。

#### 魔力貯蓄

魔力を自分の持ち物や肉体に貯蓄する。ルクスは就寝前にその日の余剰魔力を不可視の刻印状態にして肉体に刻み込んでいる。それと自作の装飾品や魔法アイテム等にも貯蓄している

#### 魔力開放

武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。絶大な能力向上が得られるが魔力の消費が通常の比ではない為、今現在ではもって10分程度である。

魔術発動時の自己暗示は『ゲットセット術式開始』

## キャラ設定1（後書き）

とりあえずこんな感じですよ。

魔術は基本的にf a t e系からパロってます。

また色々書き換えることがあるかもしれませんがご了承ください。

## 第一話

### 第一話

S I D E    ルクス

はじめまして、皆様。ルクス・アヴェスターと申します。

突然ですが、この度めでたくメルディアナ魔法学校を卒業出来ました。

これで退屈な授（g y）じゃなくて大嫌いな魔（h）ゲフンゲフン、失礼  
まーとりあえず今の環境からおさらばです。

でも自分でもよく飛び級で卒業できたなと驚いております。僕は魔法学校の人間ですが  
魔法は一部を除いて殆ど使えませんし、色々な先生方が言うには少し性格が歪んでいるそうです。  
でも座学や体術等の成績は主席だったようなので、その辺りを評価されたのかもしれませんが。

しかし真面目に魔法使いとして学ぶ生徒達には僕の待遇は少し目に

余るものだったのかもしれない。

なんせ卒業式の際に僕の名前が呼ばれた瞬間にホール内の空気が一瞬凍りつきましたよ。

で、壇上まで卒業証書を取りに行くときの回りの視線が痛いこと痛いこと。ちよっと泣きそうになったりならなかったりしました。

そして証書を受け取ってから自分の席に帰るときなのですが、主席（総合評価）で卒業したネギ・スプリングフィールド君なんて

僕をすぐ睨んでましたからねー。そりゃあ彼とは価値観の違いとかで時々衝突していましたが、ここまで睨まれる事はないと思っんですよ。もしかして、一部の座学で主席が取れなかったこと恨んでるんでしょうか？良いじゃないですか、僕なんて座学以外の魔法実技評価は殆ど赤点ギリギリですよ？

とまあ卒業式のことはいくらにして、僕は今学校の渡り廊下で卒業証書を眺めています。

校長の説明によると、授与後しばらくすると卒業後の修行場所が浮かび上がってくるそうです。

ぶっちゃけ魔法使いとしての修行はどうでもいいのですが、とりあえず学校の予算でここ以外の場所に行けるのなら儲けものです。

と、やっとつっすらと文字が浮かび上がってきました。えーと、何々………

・・・・・・・・・・はあ？

『日本で先生をすること』なんですかこれ？証書のバグでしょうか？  
数えて10歳程度の子供が学校の先生だなんて・・・

とりあえず校長に聞いてくるとしましょうか

## 第一話（後書き）

自分で書いてなんですが

何、この主人公・・・orz

あと感想とかレビューとかくねるとつねしりです

## 第二話

### 第二話

S I D E    ルクス

バグっている卒業証書を持って僕は校長の下を尋ねました。

「校長先生ー！、この卒業証書バグってますよー！ー！」

校長の後ろから叫びました。すると校長の影になっていて分かりませんでした。他の生徒と話をしていたようです。げ、ネギ達だよ……。

僕は苦笑いしながら校長に近づき、話していた生徒達に会釈をして校長との会話に割り込みました。

「で卒業証書がバグっているみたいなんですけど、どうやったらリセット出来るんですか？」

僕は証書のおちこつちを押しながら尋ねた。その様子に校長はため息をつきながら

「卒業証書はバグらん！リセットも出来ん！！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じゃ！！！！」

マジで！？じゃあこれ考えた人って何考えて・・・ああ、そういうことね・・・

「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

僕は校長の顔を見上げながら笑顔でそう言った。

S I D E 校長

卒業式が終わり、わしは校長室のほうへ帰るために渡り廊下を歩いていた。するとそこにネカネとアーニヤ、少し遅れてネギがやってきた。

話を聞いてみると、修行内容のこのようだった。ネギは『日本で先生をすること』と出たみたいじゃ。

「ほう、『先生』か。だが、卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためには頑張って修行してくるしかないのう。まあ、頑張んなさい」

と彼らに話していた。そこに・・・

「校長先生ー！ー！この卒業証書バグってますよー！ー！！」

ルクスがやってきた。

ルクスはわしが振り返った時にネギの顔が見えたのでバツの悪そうな顔をしたが、苦笑いをしながらわしの下にきて

「で、卒業証書がバグっているみたいなんですけど、どうやったらリセット出来るんですか？」

と言いおった。このクソガク いや、こやつめは・・・

わしはため息をつきながら「卒業証書はバグらん！リセットも出来ん！！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じゃ！！！！」と怒鳴ってやった。

するとこやつは、意外そうな顔をしたあと何かに納得したように

「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

とのたまりおった。口の減らん奴じゃ！！

S I D E  
ルクス

校長に『修行内容考えた人バグってる』と言った後に気づきました。

“修行内容考えているのは主に校長”だっつと云う事に。

まあ、言ってしまったことは仕方ないことです。笑顔でごまかすことにします。

たまたま空気が読めない発言をしてしまうのは僕の悪い癖ですね。

笑顔での誤魔化しが効いたのか、校長は僕とネギを交互に見てからこう言いました。

「二人がいく修行先の学園長はわしの友人じゃからの、安心してが  
んばんなさい」

とまとめてその場からそそくさと引いていきました。

ってネギも一緒なんですか？

何となくネギ達のほうに目を向けると、

微妙に機嫌の悪そうなアーニャ

苦笑いのネカネさん



## 第三話

### 第三話

S I D E     ルクス

ネギの突き刺さるかのような視線を背に受けながら、僕はその場を後にしました。

学校の裏の山にある家に帰り制服と卒業証書を置き、僕は早速日本への荷造りを開始しました。

一応予定としてはあと二ヶ月近くあるみたいなのですが、二カ月後に行ってイキナリ先生&日本での生活を

やれと言うのは結構きついものがあるような気がするので、僕はネギよりも先に日本に行つてある程度の準備うんぬんを済ませて置くつもりです。

例えば同じ日に二人で日本に到着して同じ場所で生活するに当たつて、二人同じ部屋で協力して生活する羽目になりでもしたら、胃に

穴が

開きかねません。ぶつちゃけ一人暮らしでも結構大変だったりするのにも、甘えん坊で自分のこともままならないネギと一緒に考えると考えたら

それこそ悲劇ですよ。修行をすっぽかしてダツシユで逃亡するかもしれない、結構切実に。

そんなこんな考えながら動いてる内に荷物の整理は殆ど終わってしまいました。着替えや魔法アイテムとその他材料、資料 e t c は魔術で空間を拡張した旅行鞆に

全部つめ終わりましたし、大きい目の家具等はこの家に置いていきますし、傀儡用の人形はあとで転送魔術で引っ張るとして、あとはまほネットの方の店を・・・

あ、その前に校長に先に日本に行けるように頼まなくてはなりませんでした。ちょっと行ってくるとしましうか。

S I D E 校長

ルクスやネギ達が帰った後、わしは麻帆良に送る用の二人の書類を

準備しておつた。すると突然校長室の扉が強く叩かれ直ぐに勢い良く開けられたのじゃ。

「度々すいませーん！ちよーんっとお願ひがあるんですけど  
ー！ー！」

「返事があるまで待たんか！あと声が無駄にでかい！」

「はい！5回目くらいから気をつけます！」

「次から気をつけんかい！！！！！」

わしは大声を出した後、ため息をついてから頭を抱えた。

それを見たルクスは「おや、お疲れですか？もう年何ですし無理は駄目ですよ？」と自分はまったく関係ないかのようにそうほざいた。

「この疲れの原因はほとんどオヌシとのやり取りが原因じゃ！」

「そんなことよりどうしても頼みたいことがあるんです、校長先生。」

「話を逸らしおつてこのくそがk・

ここで更に怒鳴ると話が進まなくなりそうじゃから、こやつのお話を聞いてやることにした。

聞いてみると日本行きを早めて欲しいということじゃった。一応訳を聞いてみると、至極真つ当な理由じゃった。とりあえず、検討する

言うことで話を終わらせようと試みた。じゃが・・・

「そうですね、じゃあいつ決まるか毎日挨拶ついでに聞きにきますね。」

毎日こいつにこの調子で来られたら本気で体調を崩しかねん。じゃからわしは数日中には日本行きを決めてやるからと約束してルクスを帰らせた。

まったく・・・本当にやつかいな奴じゃわい・・・。

次の日

S I D E  
ルクス

いやー数日中って言うから二、三日は掛かると思っていたんですけどもう日本行きが決まるなんて思っても見ませんでしたよ。

校長もやるときはやりますね。

校長の送ってきた手紙によるとだと日本での下宿先は先方がもう用意してくれているらしいですから向こうでの衣食住は心配しなくていいらしいです。

それと向こうの学校の資料も貰いました。麻帆良学園ですか？写真で見ると限りだとヨーロッパの町並みみたいですね。

とりあえず同封の写真や資料をざっと見ました。おや・・・もう一枚封筒が・・・。

開封すると、明日出発の飛行機のチケットでした。

・・・何か早くないですか？まあ、早く行きたいと言ったのはこっちですから良いんですけど、こんなに速い仕事をされるとまるで僕にさっさとここから出て行って欲しいかの様に勘違いしてしまいますよ。

と、校長をそんなに悪く言うのは止めときましよう。寧ろこんなに早く決めてくれた御礼の手紙くらい出しときましよう。

僕はそう思いながら『開封した瞬間爆音でお礼の言葉を述べる、そして自動的に爆発して消滅する』手紙を校長宛に出すことにしました。

因みに僕が行ったあと、風の噂によると校長室のガラスが全損したらしいですよ。

## 第四話

### 第四話

#### 麻帆良学園近郊の駅付近

S I D E   ルクス

いやあくまいったまいった。空港から最寄の駅まで行ったのは良かったんですけど、ついつつかり乗り間違えてしまうとはー。いやー三重県まで行ってやっと気づきましたよー。赤福美味しかったです、うん。

さっき学校側に連絡したら駅のほうまで迎えの人を寄越してくれるって言っていましたし、ベンチに座って茶でも啜りつつ気長に待つとしまししょうかねー。

S I D E 近衛 木乃香

さいぜんお祖父ちゃんから電話が在ってお客はんを迎えに行つてくれへんかと頼まれた。

明日菜は珍しく部活だし、あたしも暇やったからすぐOKした。

で、今はそのお客はんが待ってるっていう近くの駅まで迎えに行つとる最中なんや

お祖父ちゃんが言うにはお客はんはまだ10歳の子供って話やった。あんまり長い時間待たせるのはまずいと思つてあたしはちびつと急いでいったんや。

で、今駅に着いたんやけど・・・お客さんの名前ってなんやろな？名前も知らんし？てか男かいな女かいな？今お祖父ちゃんに電話したら、留守電らしくて繋がらへんかったわ。  
しゃーない。見た目10歳前後のそれっぽい人に手当たり次第声掛けてみるか。

S I D E ルクス

待ち始めてから30分ほど経つたころでしょうか、突然見知らぬ女性の方に声を掛けられました。

「なあなあ、君がお祖父ちゃんのお客さんかえ〜？

……お祖父ちゃんってだれですか。  
僕が呆然として彼女の顔を見上げると

「あ、お祖父ちゃんってのは学園長なあ。で、頼まれて迎えにきたんやけど君がお客さんでいいんかなあ？」

そう朗らかな笑顔を浮かべながらそう説明してくれた。

「うちの名前は近衛木乃香や。で、君の名前は何て言うん？」

近衛……？確かこの学園長も近衛姓だったな……。ああ、じやあこの人は学園長の孫って事か。

僕はベンチから立ち上がり、姿勢を正して

「はじめまして、ルクス・アヴェスターです。どうぞ気軽にルクスとおよび下さい、近衛さん」

そう言うと彼女は少しだけ怪訝な顔をした、するとそこに丁度彼女の携帯が鳴った。

「はいはい〜あ、お祖父ちゃんか〜。うん、今会えたで〜あ、うんうん、じゃあ直ぐ行くわ〜」

そこで通話を止め、僕の方へ向き直り

「今から学園長室に連れて来て〜やって、ほな、行こか〜」

と言って僕の手を掴んで歩き始めた。

何ていうか、独特な雰囲気の人です。・・・でも、悪い感じじゃないです。

SIDE 近衛 木乃香

お客さんと会ってお互いの自己紹介をした時に、何か変な感じがしたんや。で、ちょっと聞いてみようとした時に携帯がなってもうた。で、お祖父ちゃんが今から部屋に来てって言っとるからとりあえずこの子の手掴んで歩き出したんよ。<sup>ルクス</sup>  
その時に、何となくさっき疑問に思った事を聞いてみたんや。

「なあなあ、ルクスはお嬢ちゃんてええんよな？」

そういうと、その場でずっこけられてもうた。

しもた、男の子やったんか。いややわあ何ていうか中性的な感じやったから良くわからへんかったわあ。  
それにしてもナイスリアクションやったわあ。ええツッコミになれるわあw

SIDE ルクス

「ルクスはお嬢ちゃんでええんよな？」

思わずつつこけましたよ、ええ。

お嬢ちゃん？僕の何処を見て女の子だと！？髪か？この中途半端なショートカットの所為か！？

と思いながら道端でorz状態になりました。それを見ていた近衛さんは

「ごめんなあ、ほらっ結構かわえかったからついなあ？飴ちゃんあげるから許してえ？」

と挫折する僕の横にしゃがみ込んで謝ってきた。飴を差し出しながら。

僕は幼児か！？こんなお菓子で誤魔化されるか！！でもくれるなら貰っておくことにする。

僕は立ち上がり、飴を受け取り口に入れる。・・・うん、美味しい。そんなやりとりをしているうちに僕は学園長室に着いた。

## 第四話（後書き）

多分次の更新日は明日中です。

感想レビュー等があればもっと頑張れる気がします

## 第五話

### 第五話

学園長室にて

S I D E 学園長

さて、そろそろルクス君が来る頃かろう。そうそう、さっき向こうの校長から届いたばかりの書類があつたんじゃった。来るまで見ておこうかのう。

えーと何々、ふむふむ、やはり魔法使用に難があると……。じゃが体術や知識は大したものみたいじゃのお、ん？注意事項じゃと？むう……

書類を読みふけておると、突然扉がノックされ木乃香が覗き込んで来た。わしは書類を机の中に仕舞い、木乃香とルクス君を招きい

れた。

木乃香はともかく、ルクス君はやや頭を垂れたまま部屋に入ってくる。緊張しとるのじゃろうか、部屋のあちこちをキョロキョロと見回しとる。

そこでわしが彼の名を呼ぶと彼は顔を上げた。

そして彼とわしの目が合った、その時

ゾクッ

ルクス君は琥珀色の目でわしを見てきた。書類と同封の写真では翡翠色の目だったはずじゃが……

その冷たく射抜くような、いや、見抜くような視線にわしは思わず冷や汗をかいた。じゃがその後瞬きをすると直ぐに笑顔でわしに挨拶をし始めた。

その目は写真と同じ翡翠色をしていた。

うむ、きっと何かの見間違いじゃろう。

S I D E ルクス

近衛さんが学園長室の扉をノックし、顔を覗き込む。その後直ぐに部屋に招きこまれた。そこには学園長である『近衛 近右衛門』が机の向こう側で座っていた。

名前と身分等の情報はあつたけど、実物は始めてみた。

それにしても本当にこの人、人間か？特に後頭部が。日本で言うところの「妖怪ぬらりひょん」かと思つたよ……。それはさておき・

部屋に入った時、外からはわからなかつたけど何らかの魔法が感じられた。恐らくは対魔法妨害用の結界だと思う。いつも張つてあるのか今日だけ張つて

あるのか、まあ殆ど魔法が使えない僕には関係ないけど。一応魔眼を発動して術式解析だけしておく。ある程度室内を見回すと、校長が名前を呼んでくる。

僕はそのまま、魔眼発動状態のまま学園長と視線を合わせる。さすがは高位の魔法使いだけはあるみたいです。何らかの反応を示しました。僕は瞬きをして

魔眼を解除してから、学園長と挨拶を交わしました。

S I D E 学園長

「はじめまして、ルクス・アヴェスターです。今回は僕の勝手な事情を考慮してくださいましてありがとうございます。」「

ルクス君はと言って礼を述べた。うむ、礼儀正しくてなによりじゃ。そして荷物と一緒に持っていた紙袋を手渡して来る。

「これ、つまらない物ですが皆さんでどうぞ。」「と」「いやいや、修行で来たんじゃないそんな気を使わんでも……。」「  
と言いつつわしは袋の中を見た。そこには……。

『赤福』『草加煎餅』と書かれた箱が入っておった……。

………何でじゃ？

わしはとりあえずそれらを紙袋にしまい、ルクス君との会話を続けることにした。

「なんでも修行のために日本で学校の先生をとか……そりゃあ大変な課題を貰ったのう」

わしは笑いながらそう言った。

「はい、よろしく願います。」「

彼は笑顔でそう返してくる。うむ、何とかかなりそうじゃのう。

「しかし、まずは教育実習とゆうことになるのう、とりあえず一週間後から三月までじゃ。実習が始まるまでこちら側の生活になれておくといひ」

つと、わしはそれを言ってからあることを思い出した。うーむ、まだ一人来てないが言っておこうかのう……。

つと思つとつたら部屋の扉がノックされた。わしはすぐに入ってくるように促した。

S I D E 神楽坂 明日菜

突然、部活中に学園長から電話が来た。何だろ珍しいと思ひながら電話に出てみると、部活が終わり次第学園長室に来てくれたってさ。で、部活が終わって

からちよつと急ぎ気味で学園長室に走つたのよ。で、扉をノックしたら直ぐに返事が返ってきたから部屋に入ったら、木乃香と見知らぬガキンチョが居たのよ。

「げっ」ってあからさまに嫌な声と表情が出たけど顔を左右に振つて誤魔化して学園長に目を向けたのよ。でもその時に何か視線を感じたからガキンチョの方をチラツと見たら、

そいつは私の方を見て、ニコツと微笑んできたのよ。……ツ！  
？何か一瞬ドキツとしたじゃない……。

S I D E ルクス

突然の来訪者が入ってきました。彼女は近衛さんと同じ制服を着ていました。おそらく近衛さんの同級生でしょうか。僕がそう思っているとは彼女は僕の姿を見たたん、

「げっ」とあからさまに嫌そうな声と嫌そうな顔をしました。

……初対面の人間に向かってそれはないでしょう……僕の心がガラスの様に繊細だったらどうするんですか。

で、その後彼女は近衛さんの横に立って誤魔化すかのように顔を左右に振っていました。そこで何故か妙な魔力を感じたので、再び魔眼を使用しようと思いました。ですが僕が視線を向けて

居るのに気づいたようです。意外と感が良いですね。とりあえず笑顔で会釈しておきました。

S I D E 学園長

さてアスナちゃんも来た事じゃしそろそろ言っておこうかのう。

「うむ、アスナちゃんとかのかに頼みがあるんじゃ、突然で悪いんじゃないがルクス君をしばらく二人の部屋に泊めてやってくれんかの？  
まだ住む所決まっとらんのだよ」

「げ」

「なっ？」

SIDE ルクス

「ルクス君をしばらく二人の部屋にとめてやってくれんかの？まだ住む所決まっとらんのだよ」

「げ」

「なっ？」

「一体何を考えているんでしょうかこの妖怪は？やはり人間同士の常識と言うものは理解できないのでしょうか。ほぼ初対面の男女が行き成り同棲などで

出来るわけ無いじゃないですか。普通の女性ならそんな事は嫌がるはずです。そう思いながら僕は困惑した目で近衛さんと神楽坂さんたちの方を見ました。

「・・・あれ？近衛さんはOK的な顔になってますよ。でも神楽坂さんは嫌そうです。というかさっきの「げ」は聞こえていますからね。そんなに嫌ですか、そうですね・・・」

「僕の防弾ガラスのように繊細なハートに痺が入りましたよ・・・」

「地味に落ち込んでる僕を見た神楽坂さんが「大体あたしはガキが嫌

いなんですよ！」って更に追い討ちを・・・ああ、輝が亀裂に・・・  
。落込んでいる場合じゃないですね。僕もさすがにこれは黙っておけませんので。

「大丈夫ですよ、学園長、それに近衛さんと神楽坂さんも。こつちへ来る前に駅周辺で住宅情報を検索済みです。もよりの不動産屋にも電話で聞きましたしあれだつたら一週間あれば入居可能ですよ。」

それを聞いて学園長が、え？つて顔をする。一応こんなこともあるうかと調べておいて正解でした。

「とりあえず、部屋が正式に決まるまではウィークリーマンションかビジネスホテルで寝泊りしますので、二人に迷惑はかけませんよ。」

と、言うのと近衛さんにもう反発されました。

「駄目やって！子供一人じゃ大変やる？ご飯とか洗濯とかどうするん！？」

「アスナも！ルクス一人じゃ可哀そうやん！！暫く我慢してえな！！」

さつきとは違う強硬な姿勢を見せる彼女に僕も神楽坂さんも反論できず、僕はとりあえず下宿が決まるまでお二人の部屋に居候するこ

とが強引に決められました。

神楽坂さんもかなり不服そうでしたが、一応納得していました。それを学園長は微笑ましそうに見ていました。この妖怪め・・・

取りあえず二人の部屋に居候する事が決まったし、神楽坂さんにはまだ挨拶もしていませんので改めて挨拶をすることにしましょうか  
僕は二人の方へ向き直り姿勢を正し、

「ルクス・アヴェスターです。近衛さん、神楽坂さん、よろしくお願ひします。」

と深々とお辞儀する。すると

「『神楽坂さん』じゃなくて名前で呼べばいいわよ、歳も近いんだし。木乃香もそれの方がいいでしょ？」と神楽坂さん、いや明日菜さんが言う。

「うちらも名前で呼ぶから丁度ええな。」と微笑んでる近衛さん、いや木乃香さん。

改めて二人の名前を呼んでお礼を言った。その後僕らは学園長室を後にしてそのまま二人の寮に行った。

．．．．．嵌められた．．．女子寮って．．．しかも女子校って．  
．．．そんなの聞いてない．．．

この晩、僕は学園長めがろひびょうに怨嗟の念を送った。

## 第六話

### 第六話

#### 麻帆良学園学生寮

#### S I D E ルクス

ここが女子寮と分かったのでここは早急に下宿先を見つける次第です。で、いきなりですが問題が発生しました。

一つ目、居候になるのですから自分は家事等を担いたいと申し出たのですが、速攻で木乃香さんに却下されました。

幼少のときから一人暮らしをしているので、家事には自身があるのに・・・それに手伝い位は居候としての義務かと・・・

木乃香さんが言うには、子供は遠慮してはいけなとか何とか。それは余計なお世話です。ですが攻防の末、夕食後の片付けと部屋の掃除をすることは何とか許されました。ああ、安心した。

何もしなくていい何て拷問ですよね。

もう一つ問題がありました、それについてはまだ議論中です。

それは、寝るところの問題です。僕は今夜はとりあえず毛布でも被って床で寝ると言ったのですが、木乃香さんが許してくれません。自分と一緒に寝たらどうかと提案されました。いやいや、それはちよっとどうかと。確か日本には『男女七歳にして同衾せず』という言葉があるとかないとか。子供だから遠慮してはいけないとかそんなことを言っている場合じゃないと思うのですが……。

「という訳で、僕はやはり床で寝ます。寝具は明日買いますから一日くらいなら問題ありませんよ。」

「でもまだ寒いやる？風邪引いたらどうするんよ、だから今日一日くらいは我慢して一緒に、な？」

「ですが、日本には『男女七歳にして同衾せず』という言葉もあると聞いています。だからその……。」

「難しい事知ってんなー。」

話は平行線でまったく決まりません。すると、今まで我関せずだった明日菜さんが……

「いい加減にしないで！ガキンチョは大人しく言う事聞いてりゃいいのよ！！」っと僕の襟を掴んで木乃香さんのベッドに投げ込みました。

「ぶっ！？」布団にダイブする僕。そして即座にベッドに入り僕の

退路を塞ぐ木乃香さん。・・・この二人コンビネーション抜群すぎませんか？

このままでは強制的に話を持って行かれそうだったのですぐさま起き上がり二人の反論しようと思いました。ですがすぐ木乃香さんの言葉に遮られました。

S I D E 木乃香

まだ冬真っ只中やし一緒に寝ようって言ってんのにルクスは一人で床で寝るって言うんや。まだ子供やからええやんって言うても難しい理屈で反論しようとするんや。やからうちはアスナにちよいつと目配りしたんや。

視線だけで、（まかせた）ってアスナを見た。するとアスナがちよいと悪人顔で頷いて

（了解<sup>ラージヤ</sup>）って視線で返してきた、気がした。

すると直ぐにアスナは「ええ加減にしー！」的に怒鳴って、ルクスの襟首掴んでうちのベッドに放り込んだんや。いや、そこまでせーへんでも・・・

で、それを見てうちは速攻でマツハでベッドに潜り込んでルクスの退路を塞いだ訳よ。でもルクスがまだギャンギャン言いそうやった

んで

「ルクスはうちの事嫌いなんか？」

そしたらルクスは直ぐに下向いて

「いや、あの、そ、そんな事は、無いです・・・」

・・・勝った！

SIDE 明日菜

まったく、ルクスは。初対面の態度はちょっと大人っぽかったから大丈夫だと思っただけどやっぱガキねー。ん？木乃香がこっち見て・・・

何か目配せを・・・ハーン、『やれ』ってことね。ということであたしは軽く頷いてルクスの襟首を引っつかんで木乃香のベッドに放り込んで

やったのよ。あー！スツキリしたー！。第一最初の居候の義務がどうこう言ってる時からちよつとイラッとしてたのよねー。ガキが遠慮何て

すんなってんのよ。さーて、

「じゃ、電気消すわよー。」

まだルクスが何か言いたそうにしてたけどすぐさま木乃香に口塞が

れたわ、はい、おやすみなさーい。

S I D E   ルクス

「うちの事嫌いなんか？」

「いや、あの、そ、そんな事は、無いです・・・」

いや、あつたばっかりの人をいきなり嫌いになるとか、そんな性格してませんよ。だから僕が言いたいのはこの歳でほぼ初対面の男女が一緒に寝るのはどうかと言う事で、ちよっ！まだ話は済んで無いのになに明日菜さん部屋の電気消そうとしてるんですクツツツ！？こ、木乃香さん、口を塞ぐのは反則ですよ！？

明かりが消された。

・・・負けた・・・

僕はその日、諦めて木乃香さんと一緒に寝ることになった。結構疲れていたせいかな、部屋が暗くなると直ぐに眠気を感じてきた。

でもせめて最後の悪あがきとして体をベッドの端に寄せしておくことにして、意識を手放す事にした。

他者と眠るのは何年振りだろう・・・僕は、久方の体験に懐かしさを感じつつその日は眠りについた。

早朝、木乃香さんに抱きつかれていた。そしていつの間にか僕の腕を枕にされていた。・・・うう、腕の感覚が無い・・・。どけてえ・・・



## 第六話（後書き）

何か段々と主人公がへたレになってきたような気がします・・・

## 第七話（前書き）

居候中のことを書くところかと思つたのですがもの凄く長くなりそうな気がするので、

また余談として書くつもりだと思います・・・

## 第七話

### 第七話

S I D E  
ルクス

明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候し始めて一週間、ついに日本での下宿先が整いました。

いやぁ一応向こうで色々イギリスと魔法雑貨扱ってお金貯めてて良かったです。

ちょっと古いけど良い洋館が買えました。

建てられたのは結構昔みたいですが不動産屋がちよくちよく清掃に入っているみたいですし、リフォームもしたらしく

内装はかなり綺麗でした。勿論、電気ガス水道付きであとネット接続エリア圏内です。

学校からちょっと遠いのが難ですけど、周りに他の民家が無くても静かです。しかも裏が森だし薄暗いせいかな  
殆ど人が来ないみたいです。いやいや魔術の隠匿にはもってこいの物件です。地下室も付いてましたし。

ただ、見た目とまわりの森の印象のおかげで、学園の生徒からは幽霊屋敷と呼ばれているそうです。

そう、契約して鍵を渡された次の日に教えられました……

まあ、出てきたら出てきたで対処するから良いんですけどね。

で、取りあえず洗濯機や冷蔵庫等の必要最低限の家具が必要になったので一週間のうちはもう、ドタバタしていました。

今は大分落ち着いてさっきまで、女子寮のほうで明日菜さんと木乃香さんの部屋で夕飯をご馳走になってました。

夕食を食べ終えて後片付けをし、その後他愛も無い話をしながら時間を過ごしていました。

それから帰る時になって、明日菜さんと木乃香さんに一週間の間の

お礼をいいました。

最初はちよつと意地悪そうだった明日菜さんとも大分馴れ合う事が出来て良かったです。またおいでと言ってくれました。

木乃香さんに至っては、『辛くなったら何時でも帰って来てええんよ?』とまで。・・・貴女は僕のお母さんですか。

と、笑って別れて今は家で色々やっているわけです。

取りあえず家の地下は魔術工房に仕立てる予定なのでイギリスから持ってきた荷物を広げときましようか。

後、人形遣い用の傀儡も転移しときましようか。

まあ色々やってる間に夜は更けて行きました。

で、今さっきなのですが、妙な気配を感じました。うまくは言えないのですがなんと云うか、人ならざるモノの気配みたいなものを・

家の裏の森の奥深くから・・・

ちよつと、見てくるとしましょつが・・・

第七話（後書き）

次回、次々回位からは戦闘回予定です

## 第八話

### 麻帆良学園郊外の森

夕暮れの学園郊外の森、普通の人間なら絶対に近寄らないであろう場所・・・そう、普通の『人間』ならば・・・

森の奥まった場所で十数人の人影が見える、いや、人の形はしていない。

言うなればアレは『鬼』と言ったほうがいいのだろうか。

身の丈2m以上あるモノやクモの様な姿をしたモノ、狐やカラスに似たモノ達もいるだろうか・・・。

それらはこの森の中で皆一樣に同じものを見ているようだ。それらの視線を追う。視線の先はやや上方、木の上の方に向いていた。

暗くて良く見えない。だが、目を凝らして見てみるとそこには

、一人の少女が両手を縛られて吊るされていた。

彼女の状態は芳しくは無いが一応生きている。だが体のあちこちに打撲痕や切り傷擦り傷、服の下からは薄らと

血が滲んでいるのが見える。肋骨を骨折しているのだろうか、小さな呼吸を繰り返す度に口元を苦痛に歪めている様に見えた。

何故こんな状況になっているのかは知らないが、おそらくはこの少女と鬼達は敵対関係にあるのだろう。鬼達は彼女が苦痛に悶えるのを見て、愉快そうに笑っている。彼女が鬼達を睨みつけるとその中で一番体の大きな鬼が、その手に握っているまるで柱の様な鉄の棍棒で彼女の胸を軽く小突いた。彼女はその微かな衝撃で、小さなうめき声と苦悶の表情を浮かべる。そしてそれを鬼達はまたもや愉快に笑っていた。

日没前、私は学園内で妙な気の流れを察知した。大方、どこぞの魔法使いが学園にちよっかいでも出しに来たのだろうと、そう思って特に上には何も言わずに侵入者だけ片付けて何事も無かった様に帰ればいいと思っていた。正直、軽く見ていた。

それが甘かった。

森の奥に行ってみると、十数体の式神だけがそこに居た。良くいる下級の式神だ。数こそは多いが私一人でも十分倒せる相手だ。

「神鳴流奥義、百烈桜花斬っ！！！」

十数体の式神を数分で切り伏せた、式神は全て札に戻った。なんと他愛も無い。私は刀を納めて辺りを見回した。周りに術師の姿は無いし

どこかに身を潜んでいる気配も無かった。すると突然

パアツ

元式神だった札が光を放ちその下に召喚陣が現れ、十数体の鬼達が姿を表した。

その時私は完全に油断をしていた。鬼達を召喚を確認してから私は刀を構える。だが、その前に鞘ごと奴等の剣ではじき落とされた。

その後は、特に説明しなくても分かるだろう……。

私は奴等に叩きのめされ、木に吊るされた。体中のあちこちが痛む。腕や足の打撲裂傷はまだ軽い方だが、肋骨が3、4本折れているみ

たいだ。

呼吸の度に、痛みが沸く。

木の上から下に居る奴等に目を向ける、私の無様な姿がおかしいの  
だろうか、愉快そうに笑い声を上げている。こいつら……。

私が目を細めて睨みつけているのに気づいたのか、奴等の中でも一  
番巨体の鬼が手に持った鉄棍で私の胸を小突く。

私はあまりの痛みに、微かに苦悶の悲鳴をあげ顔を歪ました。それ  
を見た奴等はさらに愉悦に浸っていた。

それから半刻程たった頃だろうか、奴等の一人、烏族の奴が口を開  
いた。

「さて、護衛の神鳴流剣士は手に入れた。次は近衛の者だったな。」

近衛の者、だと？

まさか！？

「近衛木乃香、その少女を手に入れる。それが今回の召喚理由、だ  
つたな？」

ツツツツ！！！！！

「貴様等あツツ！！！！お嬢様に手を出す事は断じて許さ、がああッ

「!?!?」

私は怒りのあまり怒鳴り散らす、だが途中で腹を鉄棍で強く突かれ、そこで言葉を止めた。

痛みのあまり、声が出なくなった私に奴等は

「ギャンギャン喚くな、神鳴流。」

「嬢ちゃんには大切なお嬢様を手に入れるための餌になってもらうからなあ、それまで体力残しとけや。」

奴等はそう言つて盛大に笑い出す。

私を餌にお嬢様を……?

やらせない……

私のせいでお嬢様、このちゃんが不幸になると言つなら……

いつそ自ら命を・・・

そう思い

私は顎を動かし、舌を噛み切る

はずだった

そう、奴等の後ろにある気配を感じるまでは

## 第八話（後書き）

次が、戦闘回です。がんばって書きますよW W

感想、レビューあったらお願いします

## 第九話（前書き）

小分けにして書いたので色々文章的におかしいところがあるかもです。

## 第九話

### 第九話

SIDE 刹那

私はありえないものを見た。こんな森の奥深くで異形が蔓延るこの場に、ありえないものを。

私を嘲笑う鬼達の後ろに立つ、少年を。

森の暗さで顔は分からなかった、いやそれよりも目を引かれるものがあつた。

磨きぬかれた刃の様な銀髪

闇夜に光る月のように輝く琥珀色の瞳

そして濃紺の衣と黒く輝く甲冑

その出で立ちに私は目を奪われた。今の自分がどうでも良くなるくらいに。

私の目が自分達の後ろを見ている事にその内の一体が気づいたようで、ふいに首を後ろに向けた。

瞬間

鬼の首が飛んだ。

初見では何も持って居なかった少年の手に斧槍が見える。

仲間がやられた事に気付いた鬼達が順次後ろを振り返る。その度に鋭い一撃が鬼達を襲った。

少年は自分の身長よりも遥かに長大な斧槍を軽々と扱う。その動きはまるで暴風の様だった。

その荒々しい刃の舞が数体の鬼を薙ぎ払う、そして少年は斧槍の柄

の中程を持ち大きく振りかぶって鬼達へと投げつける、その一投でまた一体の鬼が貫かれ果てた。

その時、一体の素早い烏族が少年の後ろに回りこんでいた。奴は刀を振り上げ、少年の首を断たんとしていた。

無論、私は少年へ喚起を呼びかけた。だがそれは杞憂に終わった、なぜならば

その烏族を刀を押える新たな存在が現れたからだった。

その存在は、形容するならば、中世の騎士の様な格好をしていた。

全身を重厚な鎧で包んだ、人間……だろうか？ここからでは良く分からない、それ以前に本当に人間なのだろうか。

その騎士は、少年を襲った烏族の刀を右手で掴み、残った左手で烏族の頭を掴んでいる。その異常な光景に鬼達は身動き一つせず

その光景を見ていた。

ふいに少年は首を少し後ろに向け、そのまま軽く頷いた。すると騎士は掴んでいた刀を押し折り

烏族の頭を握り潰した。

不快なバキバキと言った音が響き、止む。

それを合図に鬼達は一斉に少年と騎士を囲んだ。囲まれた少年と騎士はお互いの背中を合わせ、周りを牽制する。だが……

少年は勿論騎士の手には武器が無い。先ほど放った斧槍も遠いし、それに鬼達の後ろにある。まだ十体近い鬼を無手で相手するには分が悪い。

私を突いた巨躯の鬼が鉄棍を振り上げた。そして少年に向かって振

り下ろす。少年は微動だにせずいる、いや

笑っている・・・？

S I D E  
ルクス

森の奥へ行くに連れて異常な気配が濃くなってくる。あと緊迫した  
気も感じる。

戦闘を行っている可能性があるだろうか、僕は移動しながら魔術礼  
装を身に着けておく。それと人形を<sup>エアスト</sup>一体転移させておいた。

森の少し開けたところに出た。誰かが集団になっている。僕は気配を消し、エアストを後方へ待機させてそれらを観察した。

それはどこかの術師が召喚したと思われるモノたちだった。日本の鬼のようなモノ達、皆一様にして上を見上げている。それに習い僕も奴等の見ている方を伺った。

そこには、両手を縛られて木に吊るされている全身を負傷した少女が吊るされていた。

推測だがに、彼女は学園関係者だろう。そしてあの鬼達は学園に仇なす者が召喚した使い魔だろう。

ぱっと見たところ彼女の傷は多少放って置いた所で死にはしないだろう。奴等も多少彼女に手を出して弄んではいるが、態々この学園内で殺人などは犯すまい。

それにこれだけの気配だ、もう少しすれば学園の魔法使いが助けにくるだろう。

そう思い、僕は彼等から興味が失せた。エアストを撤収して帰ろうかと思った、その時

「さて、護衛の神鳴流剣士は手に入れた。次は近衛の者だったな。」

何・・・？どういう意味だ。

僕は耳を傾ける。

「近衛木乃香、その少女を手に入れる。それが今回の召喚理由、だつたな？」

へえ・・・

彼女に手を出すつもりか、だったら・・・

僕は歯を噛み締めて、体に魔力を流した。臨戦態勢に移る。

僕は奴等の背後に近づいた、誰一人として僕の気配に気づかない。

「ゲッターセツト 投影、開始」

僕はバルティッシュ半月斧を投影する。すると僕の直ぐ前に立っている鬼がこちらに反応を示して振り返ってきた。声に気づいたか、気配に気づいたか、だがもう遅い。鬼の首がこちらを向き僕を視認する、その前に、

鬼の首を切り飛す。

その音で漸く気づいたのか、奴等は次々と後ろを振り向く。僕はその振り向いてきた奴等を順番に切り伏せていった。こいつ等彼女に気を取られていたのか、それとも格が低いのか知らないけど・・・正直弱い。

次々と倒れていくがその内の一体が全体に号令を飛ばして展開させていた。とりあえず、持っていた半月斧を展開が遅い所に投擲した。ちっ、一体しか刺さらなかったか。

ん？後ろに回りこんだ奴がいるな、中々素早いじゃないか。うんうん、良い殺気を飛ばしているみたいだね。

でも駄目だよ、それじゃあ後ろに居ますよって宣伝している様なものじゃないの？  
ほら、『アレ』が来ちゃったじゃないですか。

奴の背後からエアストが襲い奴の得物と頭を掴み、僕の方へ視線を向けた。

僕は「やれ」と頷いた。

エアストは命令通り、そいつを“殺ったやった”

その光景を見ていた鬼達は、再びリーダー格と思われる一体の号令

の元で僕とエアストを囲む。僕もエアストと背中を合わせ周りを牽制する。

そうしているとリーダー格の鬼が僕の前に立ち、鉄棍を振り上げる。後ろは後ろでエアストに向かって数体の鬼が一斉に飛び掛っていた。

甘いなあ……、思わず口元が吊上がってしまった。

僕は再び武器を投影する。

『エッケザックス  
否毀なる巨剣』

エアストの手元に……

そして僕は予め持っていた御守を<sup>タリスマン</sup>手の平に縛りつけた。

鬼の鉄棍が下ろされる。それと同時に僕とエアストが動く。

エアストは僕の頭上スレスレに剣を振るい、僕はエアストの後ろの鬼共へ<sup>タリスマン</sup>御守の魔力を解き放った。

S I D E 刹那

鉄棍が少年に当たるその時少年の背後の騎士が突如振り返った。その手には何時の間にか一振りの大剣が握られていた。

大剣は少年の頭擦れ擦れの位置を横薙ぎに振られ、少年を襲う鉄棍の主である鬼の胴体を横薙ぎに断つ。

そして少年も振り返り騎士の後ろから襲ってくるモノ達に向かって手のひらを向ける、瞬間、白い光が進り飛び掛ってくる鬼達を消滅させた。

それで戦いは終わった。

・・・凄い。

そうとしか思えなかった。

私はただただ少年と騎士を見つめ続けていた。

すると、少年が私の方を見上げていた。ハツとした次の瞬間

騎士が私の方へ、初めに少年が携えていた斧槍を投擲した。

思わず目を瞑った。だが斧槍は私をそれで私の両手を縛る綱を断ち切った。

その瞬間、私の体は地面に落下を始めていた。やばい、この体制では受身は難しい。それに傷のせいで体が思うように動かない。駄目だっ！

私は目を瞑り地面に打ちつけられる痛みを覚悟した。だが痛みは来ず、代わりに誰かに受け止められる感触が走った。

恐る恐る目を開けた、するとそこにはさっきまで鬼を屠っていた少年の顔があった。

## 第九話（後書き）

戦闘描写って難しいですねorz

次回もこれの続きが少しあります。その後にでも出てきたアイテムや人形の補足を掲載します。

## 第十話

### 第十話

S I D E   ルクス

僕は彼女を受け止めそれと同時に体の傷を解析した。全身打撲、裂傷、刀傷、それに肋骨の骨折・・・酷いなあ。

ふと、彼女は目を開けて僕の顔を見つめていた。・・・とりあえず彼女を降ろそう。

僕は彼女を近くの木の根元に座らせた。そして治療用の宝石を用意する、そうしていると彼女が立ち上がろうとしていた。

「待つて、動いちゃ駄目だよ。」

僕は出来る限り優しく言った、彼女もそれで緊張を解いてくれた様ですぐに大人しく座りなおしてくれた。

僕は彼女の胸の辺りに石を持った手を近づける。

彼女はその石をまじまじと見つめていた。

「<sup>ゲットセット</sup>治療、開始」

治療を開始する。宝石は青く光り輝く。彼女はその光を見て一瞬顔を強張らせるが、治療が効いて来たのか段々と楽そうになっていった。

そして数分後には体の内外の傷は完全に治療し終わったようだった。

僕はそれを解析で確認してから治療を止め、宝石を仕舞う。

と、そこで他の誰かが近づいてくる気配がした。二人程の気配、学園からの応援だろうか。

一応僕は魔法は殆ど使えない事になってるからここにこれ以上居るのはまずいだろう。

僕は立ち上がり即座にエアストを転移させてから彼女に背を向けた。

「あ、あの！」

彼女は僕の背中に声を掛ける。僕は彼女の方を振り向いた。

「えっと、助けに来てくれてありがとうございます。貴方は、一体……？」

僕は目を瞑って考えた。素直に名前言っちゃまずいしそれ以前に彼女が応援者に僕の特徴を言うのもまずいだろうし……。そう一秒程考えてから彼女に微笑んで、

口到人差し指を当てた。

『誰にも言わないで』

そのジエスチャーで彼女は分かってくれたのか頷いて、微笑みながら同じジエスチャーを返してくれた。  
それに微笑み返してからそのまま僕は彼女の前で転移をし、その場から離れた。

S I D E 刹那

私は彼の顔を見つめる。彼は琥珀色の目で私を見つめている、だがふと何かを思いついたかのように私を木の根元に下ろして座らせる。すると彼は何かを取り出そうとしていた。何をするのだろうか、つい、立ち上がるようにする。だが

「待つて、動いちゃ駄目だよ。」

と、優しくそれでいて凜とした声で言われた。私はその声に答えるように、木を背にその場に座りなおした。  
すると彼は私の胸の前に手を出す。そこには小さな薄らと青い石が握られていた。  
私はそれをまじまじと見つめる、すると彼の手にある石が青く輝き始めました。

私はそれを見て一瞬警戒する。だがそれも杞憂だったようで直ぐに

体中の痛みが和らぎ始める。

治癒魔法なのだろうか？だがこのようなものは始めてみます。それに何だか優しい感じがする……。

私はその光に身を預けた。そして数分後治療が終了だったのでしようか、彼は治癒魔法を止めて石を仕舞いました。すると、彼は何かを感じ取ったかのように後ろに控えていた騎士を消し、私に背を向けた。

行ってしまうのでしょうか？私はすぐさま彼の背に声を掛けた。

「あ、あの！」

彼はゆっくりと後ろを振り返る。色々聞きたいことがありますが、まずは……。

「えっと、助けられてありがとうございます。貴方は、一体……？」

私は礼をし彼の素性について尋ねた。すると彼は一瞬目を瞑り、口元に笑みを浮かべて

口に人差し指を当てました。

『内密に』と言うことなのでしょうが……はい、わかりました。

私は頷き、同じジェスチャーを返しました。すると彼は再び微笑み

返してから、夜の闇へと消えていきました。

それから直ぐに応援の刀子さんとガンドルフィーニ先生が着て下さ  
いました。そして二人に今回の報告をしました。

勿論、彼の事は一切話していません。ですが二人はしきりに他に誰  
か居なかったかと聞いてきました。ですが私は絶対に  
彼との約束を破りませんでした。

S I D E   ルクス

荒事は久しぶりですね。まあ、良いストレス解消になりましたし、  
それに人形の調子も計れましたから  
良いとしましょうか。

さて、明日は早いですからそろそろ寝ましようか。では、おやすみ  
なさい。

## 第十話（後書き）

次からは学園パートです。

皆様の感想、レビューが執筆への活力となりますw

## 設定補足01

### 設定補足01

#### 魔術礼装「玄鎧礼装」

ルクスが戦闘用に作成した魔術礼装。通常展開時にはプレストプレートと脚甲手甲のみ、完全展開時には頭部も隙間無く覆う事になる。能力は、常時展開型の対魔対物障壁、筋力動体視力強化、異常状態緩和等。

見た目は結構重厚に見えるが、普通の衣服並みに軽く出来ている。

#### 人形

ルクスが人形遣いとしての技術を駆使して作った人形。見た目は全高約2m程の騎士甲冑。ちなみに見た目はルクスの趣味である。殆ど人間と同じ程度の稼働箇所及び稼働範囲を有している。人形内に張り巡らした擬似魔術回路によって人形を通しての魔術行使が可能となっているが、使用できる魔術は強化魔術程度である。因みに見た目は殆ど変わらないが、特殊仕様の人形も存在する。

#### 『エアスト』

ルクスが人形を自動人形<sup>オートマタ</sup>として使用する際の人工精神体。降霊魔術の応用で作った人工知能。宝石等で作った『精神の器』と呼ばれる石に精神記憶等を保存している。基本行動はルクスの身辺警護を主

目的として行動する。だが大抵は常時人形姿で家の地下工房内で待機している。

一応、コミュニケーションが取る意思や知識はあるが人形そのものに発声機関が存在しないためルクス以外のコミュニケーションは難しい。(ルクス本人も細かいコミュニケーションは取れない。)  
本人(?)としては主人を<sup>ルクス</sup>大切に思っている。

因みに性別は今のところ本人も<sup>ルクス</sup>製作者も分かっていない。(肉体である人形に性別が無いための可能性が高い。)  
名前の由来は独語の“erst”意味は“第1”

## バルディッシュ

長柄武器《ポールウエポン》の一種の長い刃を持つ斧である。半月斧、クレセントアックスと呼ばれる事がある。日本的には薙刀に近いものである。

通常150cmから200cm程度の柄の先端に三日月状の斧刃が付いたものである。因みにこの作品では某魔法少女のアレとは関係無い。

(一応実在する武器です。)

## 『否毀なる巨剣』(エツケザックス)

エツケザックスは小人に頑丈に鍛えられ数々の戦を無傷のまま戦い抜いた巨人エツケが使用していた名剣。  
全長2m程あるグレートソードである。

## 設定補足01（後書き）

『エアスト』をこれから喋れるようにしようと考えております。

出てきた武具魔術等は独自の解釈設定が織り交ぜられております。  
ご了承ください。

また今度 fate っぽくランクや宝具の分類をつける予定です。

感想レビューありましたらどうぞ。

## 第十一話

### 第十一話

#### S I D E ルクス

早朝、僕はスーツに着替えて学園長室を尋ねました。そこで学園長とすずな先生から教育実習のスケジュールや担当クラス担当教科の説明を

受けました。聞いた感じでは少し大変みたいですが、何とかなるでしょう。

そして全ての説明が終り、教室へ向かうことになりました。

教室へ行く途中ですずな先生から担当クラスの名簿を頂きました。

因みに担当教科は英語です。

僕は直ぐに名簿を開いて見てみました。．．．．．何か留学生多くないですか？

てか写真見た感じでは中学生っぽくない人が居るんですけど、あ！木乃香さんと明日菜さんもこのクラスなんだ．．．あれ？この子は．．．。

と、名簿を眺めている際にクラスの前に着いたようです。何となく

窓から内部を見てみました。授業前であって教室内は結構騒がしいです。

元気があるのは良いことですね。

でも、・・・・・・・・やっぱり中学生っぽくない方々がいるなあ。。。

外から見ても仕方が無いので意を決して中に入ることにしました。

しずな先生が扉をノックして中に入り、その後が続いて僕も中に入ります。

男子が珍しいのか、皆さんの視線が僕に集まっていました。

そして僕はしずな先生に促されて教卓の前に立ち、自己紹介をしました。

「はじめまして、今日からこの学校で英語を教えることになりました、ルクス・アヴェスターです。三学期までの短い間ですが、どうかよろしく願います。」

教室内は静寂に包まれています・・・、やっぱり子供が先生なんてのは無理がありますよね。。。

「。。。か、かわいいいいいいい。。。！！！！」「」「」

余りの大声にちょっとビビったのは内緒です。

「何歳なの。。。!?」

「どこから来たの。。。!何人!?」

「今、どこに住んでるの〜〜〜!？」

怒涛の質問攻めに圧倒されました。

あまりの勢いに何も言えずに居ると、

「はいはい！ルクス先生への取材は私が仕切らせてもらうよ〜〜  
!！」

と僕と生徒達の前に割って入った一人の少女、確か『朝倉 和美』  
さんだったかな？

「えーと、朝倉 和美さんですよ？取材って一体何ですか？」

僕がそういつと朝倉さんは意外そうな顔をした。

「あれ？ルクス先生って何で私の名前知ってるの？」

「はい、さっき名簿で全員の顔と名前は確認済みです。」

と答えると、教室中から賛辞の声が上がった。

とそこで朝倉さんが突如僕にペンをマイクのように向けて

「で、これから色々質問に答えてもらいたいんだけど？」

「いやいや、これから授業でしょ？」と僕が苦笑いで答えると、

「いやあ、少しは質問に答えてもらわないと多分授業にならないよ  
？」朝倉さんは後ろを向く。

僕もそれに釣られて朝倉さんから視線をそちらに向けると、

妙にワクワクとした表情の生徒さんたちが待ち構えていた。

僕が啞然とした表情をすると、

「まあ、本のちよつとだけ個人情報晒してくれれば収まるからw」

「いや、個人情報晒させませんよ!!?」

「あ、ごめん。言い方間違えた。ちよつと質問に答えてくれるだけでいいからさあw」

まあ、それくらいなら・・・。

僕は首を縦に振って答えた。すると、朝倉さんは懐からICレコーダーらしきものを取り出して録音を開始した。

「じゃあまずは何歳からつてところで。」

「数えて10歳です。」

年齢を答えただけで教室中に歓声が沸いた。

「じゃあ何処出身?何人?」

「イギリスのウェールズの山の中出身です。で、イギリス人です。」

さらに歓声が大きくなる。そして何処からか「ウェールズってどこ?」って聞こえてくる。

「グレートブリテン島の南西ですよ。」と答えておいた。

「じゃあ今はどこに住んでんの?」

「学園のはずれにある洋館です。確か学生の皆さんからは幽霊屋敷と言われているそうですが。」

そう言うと更に歓声が大きくなった。・・・もう何言っても同じ反応しかこないんじゃないのか？  
って思っているよ、

「じゃあ次は個人的な質問を受け付けるよ。質問がある人は手をあげてね。」

つと朝倉さんが言い放った。すると何人かの生徒が手を上げる。そしてその後は生徒を朝倉さんが指をさして指名し、それに僕が答えるといふスタンスになりました。

・・・てか男相手にスリーサイズって何ですか！？好きな下着の色は？って何聞いてるんですか！！？てか聞いてどうするんだ！！！

「まあ、こんなもんかなあ。先生、また取材させてねえw」

朝倉さんはレコーダーを仕舞って自分の席に戻っていく。他の生徒も取りあえずは満足してくれたのか  
次々に自分の席に戻っていった。うう、汚されたあ~~~~。

それからしずな先生の手本の下で始めての授業をした。まあ、つかみは中の中と言ったところかな。

意外と皆さん真剣に授業を聞いてくれましたし。精進あるのみです！

と、その後職員室で他の先生方に挨拶をして細かい業務説明を受けました。それでその日は終了となりました。

一段落着いて家に帰ろうと帰路を進んでいるとき、木乃香さんから

電話がありました。内容は、少し用事があるから  
今から教室に来て欲しいとのことでした。・・・何でしょうか？も  
しかしてまた取材とか・・・？

とそのままターンして学校の方へ歩いていました。すると、少し  
離れたところで何かが落ちる音がしました。

辺りを見回すと、一人の女生徒が倒れているのが見えました。僕は  
直ぐに彼女に駆け寄りました。

## 第十一話（後書き）

戦闘時と主人公の性格が違いすぎる気がしてなりません。

感想お待ちしております。

## 第十二話（前書き）

今回はかなり短いです。

## 第十二話

### 第十二話

#### SIDE ルクス

僕は女生徒の顔を見る。！これは、うちのクラスの『綾瀬 夕映』さんじゃないか。

直ぐに彼女に声を掛けたが反応が無い。周りを見回してみる、すぐ近くに手すりの無い高い階段がある。それに綾瀬さんの物と思われる本と飲みかけのジュースのパックが散乱していた。恐らく綾瀬さんはジュースを飲みつつ本でも読んでいてこの階段から転落したのだろう。僕は直ぐに彼女の体に解析を掛けた。

全身打撲、擦り傷・・・頭蓋骨折ッ！？心肺停止状態だっ！？

不味いな・・・コレじゃ下手に動かせないし助けを呼ぼうにも人っ  
子一人見当たらない。くっ、考えてる暇も無いか・・・。

僕は直ぐに懐から一番魔力の籠った宝石を取り出し、一応予備とし  
て腕まくりをして魔術刻印を露出させておいた。

「ゲットセツト治癒、開始」宝石に青い光が灯る。「癒術刻印、開放」そして治  
療専用の魔術刻印を起動する。

強力な治癒魔術によってすぐに表面上の傷は消えていく。あとは頭  
の傷と心肺機能の回復か・・・。

僕は集中する為に目を瞑る。そして術式の増幅を図った。

何分かして途中経過を診るために治癒に重ねて解析を掛ける。する  
と頭の傷も心肺機能も回復している事が分かった。

良かった、助かってくれて・・・。僕は安心して治癒魔術を解き、  
目を開けた。そして、

・  
・  
・  
・  
・  
綾瀬さんと目が合った。

## 第十二話（後書き）

感想レビューお待ちしております。  
皆様の一言が執筆の活力となります。

## 第十三話

### 第十三話

S I D E 綾瀬夕映

これは一体どういふことなのでしょう。私は買出しついでに新刊と新作ジュースを楽しみつつ教室のほうへ歩いていて、その時に足を踏み外して落ちたのは覚えています。

で、気がついたら私の前に目を瞑って難しい顔をしているルクス先生がいました。

何故、この様なことになっているのでしょうか？そして何故先生の手に持っている宝石が青く光り輝いているのでしょうか？

あと腕のほうの刺青の様な物も同じように光ってます。私はその光を浴びながら周りを見ました。

周りには買い出しに行っていた物や読みかけの本、ジュースのパックが落ちています。それに私の制服も所々擦り切れたり砂が付いています。

私が階段から地面に落下したのは間違いないみたいです。

にも関わらず私には目立つ負傷どころか傷一つ無い状態です。  
あ、先生が目を開けました。

S I D E     ルクス

何時から目を覚ましていたのだろうか？まずいなあ・・・、バレタかなあ？「手のひらから怪光線が出ちゃっう体質なんですよw」って言ったら

誤魔化せないかなあ・・・。

と思っていると綾瀬さんが口を開いた。

「さっきのは一体何なんですか！？というか私は一体どうなっていたのですか！！？」

あ、やっぱり見てたか。僕は彼女から目線を外して明後日の方向を見る。どうしたものか・・・。

「推測ですが私は階段から地面に落下したのですよね？で、先生が介抱してくれたのでしょうか？」

その言葉に僕はうんうん縦に首を振った。仕方ない、ここは一旦真実を話しておくか・・・。

「はい、綾瀬さんはあその階段から落下したものと思われませす。そして僕が来たときには体全体に負傷が見られ、心肺停止状態にありました。」

その言葉に綾瀬さんは目を丸くした。そりゃあ驚くだろうね、ついさっきまで自分がそんな危険な状態にあっただらうし。

「頭部も強打していた為動かすのは危険と判断しましたので急遽、この場での治癒を施しました。……まだ痛いところありますか？」

僕の質問に綾瀬さんは自分の体の彼方此方を撫でてから、首を横にぶんぶんと振りました。そして、ハツと気づいたかのように、

「『治癒』とはさっきの青い光のことですか！？さっきのアレは一体何だったのですか！？先生は一体何者なのですか！！！」

そんな1km先の人間に話しかける様な声を出さないで下さい。鼓膜が破けますって。

「さっきの青い光は治癒魔「先生は魔法使いなのですか！！？」魔法使いじゃないです。僕は魔術師です。」

その僕の言葉に綾瀬さんは首を傾げる。うん、一般的には魔法も魔術も同じようなものだしね。その反応は間違いじゃない。でも魔法使って言われたくない。

首をかしげている綾瀬さんには悪いけど、何時までもここに居られない。

「詳しい話はまた後で。ちょっと僕は教室のほうに用事がありますので、悪いんですがご同行願えませんか？」僕は未だ地面に座り込む綾瀬さんに手を差し伸べる。

すると綾瀬さんはその手を握って頷き、教室に同行してくれることになった。

とりあえず僕等は綾瀬さんが落下した時に散乱した本や飲み物を掻き集めて教室へ急ぐことにした。

2-Aの教室前まで来て、妙な気配がしました。これは多分ですが教室内には大人数潜んでいます。まさか、やっぱり取材地獄という奴なのでしょうか……。

嫌だあああ！！衆人環視の中で取調べ中の容疑者のように根掘り葉掘りプライベートな趣味まで全部曝け出すのは嫌だああああ！！！！

僕がそう思いながら頭を抱えていると綾瀬さんが心配そうに声を掛けてくれました。はい、大丈夫です。ちょっとトリップしてただけですから。

僕は自分に大丈夫と言い聞かせて教室のドアに手を掛けました。うん、もしもの時は黙秘権を主張すればどうにか……。そう思いながら教室のドアを開けると、

「……ようこそ！！！！ルクス先生……！！！！」

「へっ？」

2 - A 全員に歓迎されました。

僕は教室全体に目を向け、そして自分の横の綾瀬さんを見ました。すると彼女はポンっと手を打って、

「そういえば先生の歓迎会をするのでした。忘れてました。」

何ですかそれ、僕の心配を返して欲しい。

僕は皆さんに促されて教室の真ん中へ行きました。そして歓迎会が始まりました。

まさかこんなに歓迎してくれるとは思っていませんでした。

と安心しました。すると、

「ルクス先生、宜しかったらこれをどうぞ。」

夕映さんが飲み物を勧めてくれました。

「あ、ありがとうございます、綾瀬さん。」

「いえ、あと私の事は下の名前で呼んでいただいて結構です。」

「そうですね、では夕映さんと。では、いただきます。」と飲み物に口をつけた。

そして僕はマールライオンに成った。

何だコレ！？一瞬爽やかな風味と炭酸の刺激が感じられたと思ったらその後突如ツーンと襲い来るこの辛味は！！！？鼻が痛い！！！！

僕は咳き込んだ。それを見て夕映さんは、「アレ？やはりイギリス人の方はワサビに慣れてませんか？」いや、そういう問題ではないです。

僕と夕映さんのやりとりを見て皆さんは笑っていました。僕も釣られて笑いました。誰かと笑い合える何て久しぶりの事で嬉しいです。

その後でまた皆さんからの質問攻めなどに逢いましたが、中々に充実した時間でした。

そして夜も耽り歓迎会はお開きになりました。皆さんが解散するときに、僕は夕映さんに声を掛けました。夕映さんも僕が声を掛けるのではないのかと待っていたそうです。そして僕等はとりあえず僕の家へ向かうことにしました。すると道中、後ろから声を掛けられました。

「ルクス先生、少しよろしいでしょうか？」

僕は振り返って声の主を見ました。そこには、

『桜咲刹那』さんが立っていました。

さっきの歓迎会の中でも彼女はチラチラとこちらを意識していました。たし、昨夜の事もあるでしょうから何れ話はすると思っただけです。でも、こんなに早く再開するとは夢にも思いませんでしたけど。

「何でしょうか？桜咲さん。話があるのですしたらもう少し進めば僕の家があるのでそこでもしませんか？」

そう提案すると彼女は直ぐに頷き僕の横に並んで歩き出しました。

さて・・・今夜も長くなるかなあ・・・。

## 第十四話（前書き）

一部オリ設定オリ解釈入ってます。  
苦手な方はバックステップお願いします。

## 第十四話

### 第十四話

S I D E   ルクス

家に着き、二人を敷地内へと促した。巷では幽霊屋敷と言われている場所に二人は緊張しているようだった。僕は家の玄関に手を付き、  
「Offenes Schlo?」《開錠》と唱える。小さな音がして玄関鍵が外れた。あとは二人を招き入れるのだが、その前に。

「二人とも、家の中に入る前にこれから言う言葉を言ってから入って下さい。」

「?」

「この家に入る時は初回のみパスワードを言わないといけないんです。パスを通していないものが入ると罾が作動するようになっていきますから。」

その言葉を聞いて二人とも身構えていた。

「じゃあ僕が今から言いますからそれを覚えてくださいね。」二人は頷く。

「では、・・・『じゅげむ じゅげむ じょうのすりきれ かいじやりすいきよの

すいきよまつ うんらいまつ ふつらいまつ くうねるところにすむところ

やぶらこうじのぶらこうじ ぱいぼ ぱいぼ ぱいぼのしゅーりん がん しゅーりんがんのぐーりんだい

ぐーりんだいのぼんぼこぴーの ぼんぼこなーの ちようきゆう めいのちようすけ』さあ、どうぞ。」

二人とも膝が崩れた。いや、本当にこのパスワードなんですって。

桜咲さん、此処で得物を出すのはやめて！

取り合えず二人に言ってもらって漸く家の中へ招き入れた。取り合えず直ぐに話を始めたいと思うから真つ直ぐに

リビングへ招き入れた。

リビングに二人を通してソファーに座るように促す。二人は三人掛け用のソファーの端に左右に分かれるように座り、

僕は彼女達と向かい合うようにしてテーブル越しのソファーの真ん中に座った。

さて、どっちと話すべきか・・・。

私と綾瀬さんはルクス先生に促されるままに学園端のこの家に来ました。確かここは学園の生徒の間では幽霊屋敷と言われている場所ではないでしょうか？

私も昔この話は聞いていましたが来るのは初めてです。・・・なんと云うか、少し不気味ですね。

家の玄関の前まで着くとルクス先生は扉に手をつけて何かを囁きます。すると扉の鍵が開く音がしました。魔法で鍵をしていたのでしょうか？

そう考えていると先生が振り返り、パスワードを言ってから入ってくれと言いました。何でもそれを言わないと罾が作動するみたいです。今から仰るみたいなので

聞き逃さないように身構えました。すると、

「じゅげむ じゅげむ ごごうのすりきれ かいじやりすいぎよのすいぎようまつ うんらいまつ ふうらいまつ くうねるところにすむところ

やぶらごうじのぶらごうじ ぱいぼ ぱいぼ ぱいぼのしゅーりん がん しゅーりんがんのぐーりんだい

ぐーりんだいのぼんぼこぴーの ぼんぼこなーの ちようきゆうめいのちようすけ」

思わず膝が崩れました。何ですかそれは！！ふざけているのでしょうか！？私はルクス先生を睨みながら夕風に手を掛けました。

凄く慌ててます。しかもこのパスワードは本物らしいです。なんでもこんな言葉を……。  
仕方なく私と綾瀬さんはこのパスワードを言って中に入りました。  
三回も間違えました……。

家の中に入ると中は案外普通でした。でも所々に魔力の様なものが感じられます。

先生は私達をリビングと思われる場所に招き、ソファーに座るように促しました。私達がソファーに座るとルクス先生も私達の向かい側のソファーに座りました。

先生は私と綾瀬さんを交互に見て何か考えているようでした。

S I D E    ルクス

よし、やはり先に此方から話を持ちかけた夕映さんからにしましょう。  
う。

「夕映さん、色々聞きたいことがあると思いますから僕がその前にそれを言いますがよろしいですか？」

「はい、大丈夫です。」

「途中で疑問があれば何でも仰って頂ければ、出来る限りは答えますから。」

そう言つと夕映さんはコクンと頷いた。

「まずこれはさつきも言ったことなのですが、貴女は今日の夕方に階段から落下して重体に陥りました。その時に貴女が落下した音を聞きつけて貴女の体の状態を解析してから危険な状態にあると

判断して、治癒魔術を行使しました。貴女が見たあの青い光は治癒魔術を行使した時の発光です。僕の腕が光っていたのはそれだけでは心許無いので増幅の為の魔力を使った為の発光です。まず此処まで、“貴女が一体どうなつて居たのか”と“あの光はなんだつたのか”です。」

そう言つたけど夕映さんは驚愕している。まあ、これと言って疑問も掛けられないみたいだから先に進みましょうか。

「次に“僕は一体何者なのか”ということですが、これは桜咲さんも聞きたいことではないでしょうか？」

僕は桜咲さんの方に問いかける。突如自分に問いかけられた事に驚いたのか、一瞬動揺を見せた。だが直ぐにそれを正して口を開いた。

「はい。私もそれが聞きたくて先生を訪ねました。先生、貴方は昨夜私を助けてくれた人ですか？」

やはりそれを聞きに来たのですか。別にもう隠す必要はありませんね。

「はい、昨夜貴女に危害を加えていた輩を排除し、貴女の傷を癒したのは僕です。」

それを聞いて桜咲さんは少しだけ微笑んだ。

「これから二人に僕の事を話します。いいですか？」

僕は二人の顔を交互に見た。二人は真剣な顔になってから同時に頷く。

「僕は、『魔術師』です。 以上。」

僕がたったこれだけしか言わなかったことに対して二人はどよめいていました。ですが直ぐに二人が口を開きました。

「あの、それは魔法使いと同義ではないのですか？」

「私も同感です、魔法使いの古い言い回しを魔術師と言うのではないのですか？」

ふむ、一般的、もしくは一般魔法使い的にはそういうでしょうね。ですが、

「そうですね、ぶっちゃけると同じです。だから僕が今から言う事は魔法使いとしての話ではなく、魔術師としての話として聞いてください。」

彼女達は首を傾げる。それをスルーして話を進めていく。

「まず、魔術の定義を説明します。魔術と言うのは魔力以外の方法で実現可能な『結果』を成すことです。魔法もある意味これと同じことです。」

そう言うと桜咲さんが口を挟んだ。

「待つてください。私自身が魔法使いではないので詳しくは知りませんが、魔法の中には炎や水を操って敵を討つ事や捕縛すること、あと箒や杖で空を

飛ぶ事も可能です。そんなことが、魔力を用いずに実現可能な訳がありません。」

言うと思いました。あまりにも思惑通りに言ってくれたので、思わず笑みが浮かびかけました。

「でしょうね。ですが、それは『過程』の話です。炎や水で敵を討つ事や捕縛する事、箒や杖で空を飛ぶ、それは普通の人では実現できません。」

ですがその『結果』は可能でしょう。討つ、捕縛は力ずくでも可能。空を飛ぶことも一人では難しいですが科学技術を使えば可能なことです。」

すると桜咲さんは考え込み、黙ってしまった。僕は話を更に進めました。

「では、魔術師というものについて話をします。単純に言いますと魔術師と言うものは、『根源』へ至ることを渴望し、そのための手段として魔術を用いる者

です。そして『根源』というのは世界のあらゆる事象の出発点となったモノ、ゼロ、始まりの大元、全ての原因それを魔術師達は『根

源』と呼びます。

まあ、そう言われて「はいそうですか。」と理解できるものじゃ在りませんよね。簡単に言えば究極の知識です。全ての始まりであるがゆえに、

その結果である世界の全てを導き出せるもの、それが『根源』。魔術師とは、この『根源』への到達、究極の知識なるものを求めてやまない人のことです。

元をただせば、魔術師とは根源を探求する学者に他なりません。それが根源へ至る手段に魔術を用いるから、魔術師と呼ばれるんです。

「

そこまで話してから僕は二人の顔を見た。二人とも真剣な顔で考え込んでいた。やっぱり分かりにくかったかな？  
そう思っているとふいに夕映さんが口を開いた。

「という事は先生も『根源』を目指しているのですか？」

ああ、それですか。そういえば訂正し忘れてました。

「いいえ、僕は『根源』を目指す気はありませんよ？」

「はい？」

二人は同時にそう言いました。うん、良いステレオです。

「一つ訂正するのを忘れていました。僕は自分を魔術師と言いましたが、正確には魔術使いです。『根源』への到達を求めるものを魔術師と言い、『根源』への

到達に興味が無く、他の目的の為に魔術を使うものを魔術使いと言います。……僕は自分の為に魔術を使っているだけです。」

そこまで言って僕は下を向いた。とりあえず話すべきことは話しました。あとは……。

数分ほど経ってからまた二人に向き直り、口を開く。

「さて、僕の話はここからが本番です。夕映さん、実は貴女に選んで欲しい事があります。」

夕映さんは少し動揺を見せる。だがそれに構わず言葉を紡いだ。

「二つ選択肢を出します。一つは今日見たこと聞いたことを全て忘れる、もう一つは全てを知っておきながらそのことについて永遠に口を開かず関わらず。さあ選んでください。」

僕はこれまでに無い真剣な表情で夕映さんの目を見る。夕映さんはただただ瞬きを繰り返しているだけだった。

「一応理由を言っておきます。魔術、そして魔法にも秘匿しなければいけないというルールが存在します。一般人に我々の存在を知れる訳にはいかないのです。さあ、どうしますか？」

魔術師？魔法使い？根源？究極の知識？そんな物が存在していたなんて！そんな非日常は本の中のストーリーだけだと思っていました！！

特に『根源』ですか、大変興味深いです。

それなのにルクス先生はこんな話をしておきながら、『全てを忘れるか、全てに関わらないか』何て酷なことを言うんですか！！私の選択いや、答えは決まりました！！

「ルクス先生、私は今夜聞いたことを忘れたくはありません。」

「では、関わらない開口しないという道ですか？それならそれようの自己強制証文を書いて頂きたいのですが……。」

何とそういう物もあるのですか、ますます興味深いです。

「いえ、できれば私にもう一つ選択肢を追加させて頂けませんか？」

そついとルクス先生は首を傾げた。そして先生が口を開く前に私の意見を言った。

「ルクス先生、私に魔術を教えてください。私も魔術師になりたいです。どうかお願いします……！」

## 第十四話（後書き）

誤字訂正しました。  
感想お願いします。

## 第十五話（前書き）

ほぼ全て書き直しました。  
間が空いてしまっすいませんでした。

## 第十五話

S I D E 夕映

「別にいいですよ」

と先生は言いました。

あまりにもあっけなく肯定された事に私は我が耳を疑いました。一応もう一度聞きなおしましたが答えは同じでした。思わず心の中でガツポーズです。ついついにやけ顔になってしまいました。

魔術ですか、一体どんな事を教えてもらえるのでしょうか。

本の中の魔法使いみたいに杖を持って呪文を唱えてとかするのでしょうか。

とこれからについて考えていると先生がそこはかかない笑顔で口を開きました。

「では、魔術師になるに当たって一つテストをします。」

ああ、やっぱりそういうのはありますか。どういうテストなんですか？知識系でしょうか？体力系でしょうか？

一応、図書館探検部で鍛えていますので自身はあるのですが……。

S I D E    ルクス

「その前に、大切なことを言い忘れていたので言っておきます。魔術を行使するにあたって自分の身には勿論、周りにも多大なリスクが伴います。ああ、勘違いしないで下さいね、これは金銭的や物質的な問題ではありません。主に肉体的な問題です。まず、魔術を行使する為、魔力を起こすには魔術回路と言われる擬似神経が自身の体に無いといけません。これの有無はテスト合格後に綿密に調べますので今は詳しくは言いません。で、この魔術回路を励起させて魔力を生成すると、体に反発が起こって痛みが生じます。もし魔力が暴走しようものなら回路が焼けて肉体の自由も魔術を行使することも出来なくなる可能性が多々あります。もしくは最悪、死

、それが負われるであろうリスクの一例です。」

僕はそこで話を切った。

少し夕映さんの顔色が青くなっていた。まあ、痛みはともかく肉体的に不自由になる可能性が多々あると聞かされればそうなるでしょうね。

僕は話を再開した。

「そして魔術師を目指すという事はそれ自体を秘匿して生きなくてはならないという事です。魔術は一般に知られると力が無くなってしまうものですから。」

だから全くの他人には勿論、家族にも、例え掛け替えの無い友人にも。万が一知られることがあれば

「

僕はそこで一旦言葉を切る。そして夕映さんの目を真っ直ぐ見据えて言った。

「殺してでも隠し通さなくてはならない。」

その一言で、夕映さんは目を見開いた。その反応は来ると思っていた。それを無視して僕は続ける。

「テスト内容を説明します。僕は貴女に魔術師としての覚悟を見せてもらいたい。ここに二つの条件を提示します。まず一つ自身へのリスクとして、自らの指を切り落として下さい。」

そう言うと夕映さんは体を震えさせながら視線を自分の手のほうへ移し、自らの十本の指を見ている。

「そしてもう一つ、自身以外へのリスクとして  
他者を、  
貴女の知る人間を傷つけて下さい。」

S I D E 夕映

「貴女の知る人間を傷つけて下さい。」

私はその一言を聞いた瞬間ソファーから立ち上がり、そんなことを言った本人を上から睨みつけました。

「そんな事が出来るわけ無いでしょう！覚悟で自分の指を切り落とすというのなら一瞬本気で考えましたが、寄りにもよって自分の知り合いを、他人を傷つける！？自分の欲望の為に他者を犠牲にするなんて・・・そんな事普通じゃありません！許されるわけ無いです！！！」

私はルクス先生の提示した内容に対して意を唱え、それに対して怒鳴りつけました。そうですこんな事普通じゃないです・・・。

私は立つたまま肩で息をしながらルクス先生を見据えます。すると少し俯いていた先生が私の方へ視線を向け、口を開きました。

「『そんな事普通じゃない、許されるわけが無い』？何を言っているんですか？魔術なんて言う異常なことを求めているのは貴女ではない？普通じゃない。なら何の問題も在りません。」

先生は至極静かに穏やかにそう言っています。でも、目は全く穏やかじゃないです。寧ろ怒気を通り越して軽い殺意が窺えます。

「指一本切り落とすのと知り合いを傷つけるのと、こんな事破格の条件ですよ？普通なら自分の手足を切り落として、他人の命でも奪って来いって言うくらいです。魔術師の普通なら。」

それだけ言うと先生は私から視線を外し、壁に掛かっている時計を見ました。

「今夜はもう遅いですし、今すぐ答えは出ないでしょう。だから一週間程時間を差し上げます。一週間後のこの時間に答えとテスト結果を見ます。ああ、そうだ。」

そう言うと先生は一旦席を外してから直ぐに紙と万年筆を持ってきました。

「セルフギアススクロール強制証文です。とりあえず今日の此処での会話の秘匿を守って頂きます。ここに名前を。」

先生は万年筆を私に差し出して用紙の一部にサインをさせました。ついでに桜咲さんにも。

「それでは、刹那さん、夕映さん、おやすみなさい。また明日。」

そう、私達を家の外まで送ってくれました。

私は自分の決断が間違っていたのかも知れないと、今ほんの少し後悔しています。

## 第十五話（後書き）

勝手な理由で更新を止めてすみませんでした。  
次は日曜くらいに更新予定です。

## 第十六話（前書き）

少し更新が遅れてしまいました。遅れた割には内容は少ないです。

## 第十六話

### 第十六話

S I D E     ルクス

あの晩から数日、多少は教師としての仕事にもクラスの人たちにも慣れてきました。

クラスの人たちも僕が挨拶をすると笑顔で元気良く挨拶を返してくれます。

さてあの晩に夕映さんに言ったテストなのですが、実は彼女と話をすることが出来ません。学校内で会う事はあるのですが、大抵他の人たちと一緒になのであの事に関して話せませんし彼女も僕に挨拶等は返してくれるのですが僕と視線を合わそうとしません。まあ答えを出すまでにまだ時間はありますし、彼女自身の考えも纏まらないうちに話しかけると纏まるものも纏まらなくなり兼ねませんしね。

最終的には記憶を消してしまえばいいですから。

そのことはとりあえず置いておきまして、僕は僕でちょっとした用事を済ましておく事にしましょうか。

僕は放課後、ある場所を目指して森の中を歩いていました。その場所へ至る途中で何箇所か侵入者対策の魔法が見られます。

うん、やはり彼女は関係者ですか。僕はその魔法を解呪しながら、そしてそれを仕掛けた術者が気付くように奥へ進んで行きました。

そして僕はあるログハウスの前に辿り着きました。

僕はログハウスのドアの前に立ち、何も言わずに数回ドアをノックする。そして少し間が空いてから何も言わずに内側からドアが開かれた。

「こんばんわ、茶々丸さん。お忙しいところ申し訳ありませんがエヴァンジェリンさんはいらっしゃいますか？」

「ハイ、どうぞこちらへ。」

茶々丸さんは何の疑いも無く僕を中へ引き入れた。多分、彼女から来客があるかもしれないと言われていたのだろう。

僕は茶々丸さんに連れられてエヴァンジェリンさんの前へと至る。彼女は怪訝な目で僕を睨み、僕が口を開く前に言葉を紡いだ。

「私の張った結界を解呪している奴がいるかと思えば貴様か。何故貴様にそんな事が出来る？貴様は魔法が使えないのでは無いのか！？」

「いやいや、まったく使えないわけじゃないですよ？それに解呪するくらいなら魔法じゃなくてもできますしね。」

僕は彼女の睨みに全く臆す事無く微笑みながら答える。それに彼女は気分を害されたのか不機嫌そうに足を組んで座りなおす。

「ふん、まあいいだろう。で、こんな時間に何の用だ？教育実習期間中に家庭訪問か？」

その質問に対して僕はストレートに答えることにした。

「はい、実は僕に魔法関連の知恵や技術を教えてもらいたいです。」

「はっ、何を言うかと思えばそんなことか。何で私が魔法学校を出たばかりのひよっこ、碌に魔法も使えないと言われてる奴に教授してやらんといかんのだ。」

そんなものは学園の魔法先生にでも頼んどけ。私には関係ない。」

そういうと思ってました。だからこっちも条件を提示しましょうか。

「別にただと言うわけではありませんよ？なんだったら貴女に掛けられている呪いを解きましょうか？サウザンドマスターに掛けられた呪いを。」

「私の呪いを解くだと？何をバカな事を……。私が15年間苦心しても解けなかったものを貴様ごときひよつ子見習い出来損ないの魔法使いごときに解ける訳がなかるう！！」

馬鹿馬鹿しい、条件を提示するなら実現可能なものにしる馬鹿者が！！」

このガキが……。ナギの呪いを解くだと？そんなものは不可能だ。第一今こいつに解呪される必要も無い。なんせもっ少しすればナギの息子が学園に来る。そうすればそいつの血を絞って呪いを解くことも可能だからな……。

私がそう考えていると奴はニヤつきながら、私に怒鳴られたのを何とも思っていないかのように言葉を続ける。

「ふむ、僕では呪いは解けない、と。何を根拠にそんなことを？まさかとは思いますが、たかが魔法が使えない程度でそんなことを言っているのであるのならその認識は改める必要があると思いますよ？」

私はその言葉、『たかが魔法が使えない程度』と言う言葉と、コイツの自信満々の口調と表情に目と耳を疑った。

何だ？何なんだコイツはこの私に此処まで意見するコイツは一体何なんだ？私を真祖の吸血鬼と、闇の福音と知っての物言いか？

私は困惑しながらコイツを殺気を込めて睨みつける。だがコイツは



と一緒に来るように言っておいた。

そして私はそこで見習いの小僧に対するには大人気ない程の準備をする。

私を怒らせたんだ。償わせてやる。

## 第十六話（後書き）

次はルクスVSエヴァです。かなり無茶な展開に仕上がりましたが、気にしないでくれると大変嬉しいです。

あとエヴァの沸点がもの凄く低くなってしまいました。そして主人公、頼みに来た立場なのに喧嘩売りすぎ。

## 第十七話（前書き）

今回はちょっと短いです。

## 第十七話

### 第十七話

S I D E    ルクス

頼みに来たつもりがつついっつい喧嘩吹っかけてしまいました。いやあ僕の悪い癖ですね。こういった所は治さないとはいけませんね。

さて、準備が出来次第茶々丸さんと入って来いとこの事ですが、まさか地下にダイオラマ魔法球があるとは思いませんでしたよ。ていいますか

実物ははじめて見ましたね。いいなあこれ欲しかったんだよなあ。

と僕が魔法球をショーウィンドウに飾ってあるトランプペットを見つめる少年のように眺めていると茶々丸さんが後ろから話しかけてきました。

「ルクス先生、大丈夫なのですか？」

「へ？何のことです？」

「え、あの、マスターと闘うのですよね？」

「あーはい、多分そうなるでしょうね。エヴァンジェリンさんのあの怒り様だと。」

僕がそうあっけらかんと答えると茶々丸さんは一旦黙りこくってしまった。それから数分程沈黙が流れた後、茶々丸さんは再び口を開いた。

「あの、私がこんな事言う立場では無いのですが今ならまだ間に合います。マスターに謝った方が宜しいのではないのでしょうか？」

僕はそれを振り返らずに耳だけ傾ける。

「先生はマスターを侮っているのではないのですか？マスターは見た目は10歳の少女ですが其の実は齡600歳の真祖の吸血鬼です。魔法学校を卒業したばかりの先生では

万に一つ、京に一つの勝機はありません。考え直してください。マスターも鬼や悪魔ではありません、きつと両手足欠損くらいで許してくださいるはずですよ。」

「茶々丸さん、両手足切り落とすのはかなり鬼畜な部類の刑罰だからね？ぶつちやけ死ぬよりきついかもだからね？というか鬼や悪魔の所業ですよ。てかそれは許してる内に入らないですよね？」

茶々丸さんの言葉に軽いツツコミを入れながら彼女に振り向く。

「茶々丸さん、心配してくれてありがとうございます。でも僕はど  
うしてもエヴァンジェリンさんから知識や技術を供与して欲しいん  
です。ここで謝って次から話も出来なくなる、そういう事に  
なりたくはないんです。僕には一応目的がありますからこんなとこ  
ろで殺される気はありません。」

そういつて僕はスーツの内側のポケットに手を入れ鈍色にくすんだ  
指輪を取り出し、右手の中指に嵌めた。  
これで準備は完了だ。

「さて、僕の準備は終わりました。行きましようか、茶々丸さん。」  
茶々丸さんは黙って頷く。僕はそれを確認してから魔法球手前の魔  
方陣に足を踏み入れた。

S I D E ルクス

魔方阵に一步踏み入れると、そこは  
ジャングルに聳え立つ古城でした。

おお、凄い。アンビリバボー。あ、滝だ。お！あれって温泉じゃないですか？いやあ、入ってみたいなあ。気候も中々だし、いいなあこれ。

僕があっちこっち視線を向けると、ずっと先にもの凄く不機嫌そうなエヴァンジェリンさんが見えた。

「遅いつ！！貴様、何をやっておるんだ！！さっさとこっちに来い！！！」

僕はトボトボと彼女の元に歩いていった。でもその途中でも彼方此方に視線を向けるのを止められなかった。

「人を長時間待たせおって、何をしていた！！」

「いやいや、準備が出来たら来いって言ったじゃないですか。それに長時間って言ったって10分くらいしか経ってないですよ？」

10分程度待たせたくらいで長時間って、600歳の不死の吸血鬼

にとつては瞬きくらいの時間だろう。口には出して言わないが。

「馬鹿者！ここと外だと時間の流れ方が違うんだよ！！外の一時間はここの一日だ！！外の10分はここでは四時間くらい経ってるんだよ！！」

「そうなんですか、説明されなかったから知りませんでした。4回目くらいからは気をつけるつもりです。」

「つもりって何だ！！てか次から気をつける！！というか次は無い！！貴様はここで挽肉になるんだからな！！！！」

あ、八つ裂きから挽肉にランクアップしてる。

「挽肉ですか、じゃあ今日の夕食はメンチコロッケかハンバーグなんてどうですか？僕が作りますよ。」

「挽肉になった貴様がどうやって料理するつもりだ！！口の減らんガキだな！！」

「口は元々一つしかありませんし、増減するものでもないですよ？」

「もういいわ！！お前と漫才やる為にここに来たんじゃないわ！！！！こつちだ、来い！！」

そついうとエヴァンジェリンさんは僕を広場の方へ促した。僕はそれに従って着いて行った。

広場の真ん中まで来るとエヴァンジェリンさんは僕に振り向き、僕に手を翳してその場で止まるようにジェスチャーし、僕と10メー

トル近く離れて向き合った。

すると彼女は腕を組んで目を瞑り、考え込むような仕草の後に僕に向かつて口を開いた。

「よく逃げずに来たな小僧！今、此処こそが貴様の墓場となる場所だ！！恐れ慄け泣き叫べ！！私を愚弄した罰は全て苦痛と恐怖と言う形で貴様にくれてやるう！！」

彼女の決め台詞の後、少しの間沈黙が広がる。ただただ近くで滝が流れ落ちる音だけが響いた。そしてそれを遮るように僕が口を開いた。

「……………テイク2？」

「言うんじゃない！！人がせっかくラスボス戦風に仕上げてやろうとしたのに余計な事を言うなボケガキ！！！！」

「ラスボスと言うよりどつちかと言えばギャグキャラみたいですよ？」

「少しは口を慎め!！」

「すみません、ついつい本音を口に出してしまう癖があるんです。悪気は無いんです。」

「余計にたち悪いわ!！」

何をそんなにカリカリしているんでしょうか。まさか更年期障害というやつでしょうか?さすがにこれは口に出しては言いませんが。

「それで、どうやって僕の実力を測ってくれるんですか?やはり戦い合うとかですか?」

「ああ、そうだ。ここならば私への封印はあまり効果が無いからな。まあ、全力は出せんが貴様のような小僧一人にそこまでする必要もあるまい。」

そう言ってエヴァンジェリンさんはニヤニヤと笑う。とつても理想的な悪の笑みだ。

でも、小僧だからって甘く見ると  
すよ?

痛い目見ま

## 第十八話（前書き）

エヴァとのバトルパートの開幕です。

## 第十八話

### 第十八話

S I D E    ルクス

僕とエヴァンジェリンさんは広間の真ん中に向き合って立つ。二人の間は約10m程。

エヴァンジェリンさんの一歩後ろ位に茶々丸さんと、茶々丸さんに少し似ている女の子の人形が立っていた。

「そちらの少女はどなたですか？はっ！？まさかエヴァンジェリンさんの隠し子!？」

「違うわ!?!」

「冗談ですって、本気なわけないじゃないですか。」

「ケケッ、オカアサーン!」

「黙れ！チャチャゼロ！！」

いやあ中々にノリの良い方ですね。こう言うタイプの方は嫌いじゃないです。

「彼女達がそちら側に控えていると言う事は、三対一で戦うという事なのでしょうか？」

「そうだ。茶々丸もチャチャゼロも私の従者だからな。・・・まさか、三対一が卑怯だとか言わんだらうな？」

「三対一が卑怯だとか何とかは言いませんし、寧ろその10倍居ても構わないんですけど・・・」

「けど・・・なんだ？」

あ、怒りのボルテージが上がってる。

「はい、何といたしますか、不死性のあるエヴァンジェリンさんは大丈夫そうなんですけど、茶々丸さんはそうじゃないじゃないですか。もし取り返しの付かない

損傷を与えたら大変ですし・・・。」

「オイ、オレノ名前ハナゼイワナイ。」

「だって、チャチャゼロさんは僕の生徒じゃないですから。」

「ケケケ、オイ、御主人、アイツバラバラニキリキザンデモイーカ？」

「首だけは残しておけ、首さえつながっておけばまた何度でも切り刻めるぞ。」

「リョーカイ。」

本人を目の前に解体方法を相談するなんて何て神経してるんでしょ  
うかこの人(？)たちは。

「まあ、貴様が茶々丸の事がどうしても気になるといつのならば引かせてやる。ただし……」

エヴァンジェリンさんが指を弾く、すると

ザザザザザザ

何処からとも無く茶々丸さんに良く似た方々大量に降ってきました。

その数、少なく見積もっても200体。

・・・『寧ろその10倍居ても構わない』という発言に怒っていたのでしょうか？それとも初めから用意してたのでしょうか？

・・・大人げねー。

「さあ、もう後には引けんぞ。この物量差、どうやって立ち向かうつもりだ？くくくっ・・・。」

そう言つてエヴァンジェリンさんが一步前に出る。そして後ろに控えた茶々丸さんのそっくりさん達とチャチャゼロさんも構える。

さあ、冗談はここまでだ。

チャチャマルズとチャチャゼロさんが飛び掛ってくる。僕はそれと同時に魔術行使を開始した。

S I D E    エヴァンジェリン

私は人形達とチャチャゼロを小僧に向かわせる。人形達は勿論、チャチャゼロは嬉々として奴を襲う。まったく、困った奴だ。

私はやれやれと首を振る。すると突然

人形達が吹き飛ばされ、私の上に押し掛かってきた。

「へぶっ！？な！何だ、何事だ！！？」

私は人形達をどかして起き上がり小僧の方を見る。

そこにはいつの間にか濃紺と漆黒の戦装束を身に着け白銀の髪となつた小僧と、身の丈2m程の騎士が控えていた。

いつの間にか従者を呼んだのかと思つたが、あの騎士には人間としての気を感じられない。

「ほう、私相手に人形を使うか。中々の怪力みたいだがそれだけどうなるとでも思っているのか？」

「ただの人形じゃありませんよ。コレには一応自分の意思と言つものもあります。茶々丸さんと一緒にいたいなものです。僕の家族みたいなものですよ。」

それに、力だけしかないと考えていたら大間違いです、痛い目にありますよ？」

『痛い目に会う』その言葉に私はカチンと来る。もう、手加減は無用だ。

そう思い、私は魔法の詠唱を開始した。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、爆ぜよ風精、  
— 氷爆！—」

私が魔法を発動すると同時に小僧と騎士は後方へと下がり回避する。そしてそれを追う様にチャチャゼロが小僧へと200体の人形達が騎士へと追撃する。

騎士は人形達に一齐に囲まれる。そして小僧は無手のままで剣を振

り回すチャチャゼロの攻撃を回避し続けていた。

そしてその回避が終わりを迎える。小僧は隅に追いやられた。あとはチャチャゼロの一撃で仕留められる、そんな状態だ。

「なんだ、それで終わりか！痛い目に会わせてくれるんじゃないかなのか！！全く、口だけは達者だったな小僧！！さあやれ、チャチャゼロ！！取りあえず手足を切り落としてそいつを私の元に引きずって来い！！」

「アイヨ！一刀両断！！」

チャチャゼロは剣を振るう。だが、それすらも小僧は避ける。そして振り向きざまに切り付けようとしたチャチャゼロの動きが、止まる。

「どうした、チャチャゼロ！何故そこでやめる！！」

そのまま振り向きざまに切り付ければ小僧の足の一本くらいは落とせたものを。一体何が……。

「御主人、コリヤ一体何ダ？」

良く見ると、チャチャゼロを絡め取る何かが見える。何だアレは？捕縛魔法なのか？

「小僧、何だコレは！！貴様一体何をした！！」

私はその場で捕縛されたチャチャゼロから悠々と離れる小僧を睨みつけつつ怒鳴った。

「何だコレと言われましても、今は戦っている最中ですよ？敵が自らの手の内を態々丁寧に教えてくれるとでも本気で思っているんですか？冗談は止めて下さい。」

そう小僧は口調は今までと変わらず、だが冷たい感情で私にそう言い捨てる。そして

「さあ、次はこっちの番ですよ？」

と小僧は不敵に笑った。

とりあえずチャチャゼロさんを絡めているモノ、『シユタール・ランケ鋼の臺』はそう簡単には外せない。

そしてエアストの方は放って置いて構わないだろう。相手も僕の生徒じゃないし。

さて、今度は此方の番だ。僕は両手に魔力を集中する。

「ゲットセツト 投影、開始」

僕は右手に紅い長槍を、左手に黄色の短槍を投影し、間髪いれずに瞬動でエヴァンジェリンさんを間合いに捕らえ、朱槍を振るった。

「なっ!?!くっ!」

エヴァンジェリンさんは朱鎗の穂先を寸前でかわす、だがそれに続けて僕は黄槍で逆向きに薙ぎ払う。だが

ガキン

とそんな音がして槍が対物障壁で受け止められる。だがそれをモノともせず僕は彼女を蹴りつけ、その反動で後ろに下がった。

彼女は僕の蹴りで一瞬よろめいたが、直ぐに体制を立て直して僕が再度向かってくる前に魔法を唱えた。

「魔法の射手!!!氷の17矢!!!」

無詠唱の魔法の射手。氷の氷柱が僕を射んと飛んでくる。だが、僕はそれを両手の双槍で叩き落しながら彼女へと突っ込む。

そして黄槍にて連続した突きを見舞う。だが全て障壁で受け止められた。僕は苦々しく顔を歪める。

それを見て彼女はニヤリと笑い、魔力を込めて爪を振るう。

僕はそれを朱槍の柄で受け止め、再度黄槍で彼女に突きを繰り返して受け止められる。

そんな事を数度繰り返してから、僕は彼女から離れ双槍を構えなおしてから彼女に突撃する。

そんな僕の行動を見て彼女は愚かと言わんばかりの笑みを浮かべ、前面に障壁を展開する。

これまでの突きから見れば、彼女の障壁を破ることが不可能なのは誰が見ても分かること。このまま突撃したところで彼女の障壁は破れない。

だけど、それはこれまでの話。

僕は朱槍にて突きを放つ。彼女は障壁を展開したまま微動だにしない。  
かかった。

僕は朱槍の真名を開放する。

ケイ・ジャルゲ  
破邪の紅薔薇！！

朱槍は紅い輝きを見せ彼女の障壁へと穂先を触れ、

そのまま障壁を無いものとして彼女の肉体に突き刺さる。

「な、にい！？」

彼女は槍の穂先が障壁を抜ける瞬間に身を捻り手をかざし、急所へと刺さるのを防ぐ。だが朱槍は彼女の手を易々と貫通して彼女の胸擦れ擦れまで突き刺さった。

僕はそれを確認し、すぐさま槍を引き抜きつつ後ろへと下がった。

僕は槍を構えなおしつつ彼女を観察する。彼女は槍が貫通した手を

見ながら驚愕した表情を浮かべ、僕の方へと憎憎しい目を向ける。

そんなやり取り中に、僕の横にエアストがやってきた。僕はエアストに朱槍を渡しつつ後ろを見る。

そこには手足を破壊された人形達が積み重なっていた。僕の人形と作りが違うから良く分からないが、！壊れている《死んでいる》ものは無いみただった。

すると僕が人形達に意識を向けている少しの間に貫かれた傷を再生したエヴァンジェリンさんが僕に肉薄する。だが、エアストの放った朱槍の一撃によって肩を突かれ後方へ弾かれる。

それと同時にエアストがエヴァンジェリンさんに猛攻を仕掛ける。彼女はエアストの突きを避けつつ魔力を込めた爪で攻撃するが、それも朱槍によって受け止められていた。

そこに、僕は黄槍の真名を開放して交戦に加わった。

S I D E      エヴァンジェリン

何だ、あの朱い槍は？何故私の障壁を貫通した？打ち消されたわけではない。一体何が起きたというのだ！？

それに何なんだあの騎士は！？私の人形200体をたった一体で打ち破り、今はこうして私と渡り合うだと？これがあの小僧の人形だと？

あの槍と言いこの強力な人形と言い、一体この小僧は、コイツは何者だ！！？

私はそう思考するのを止め、騎士との戦いに専念することにした。

この騎士が小僧から渡された槍は未だに紅く輝きつつ、度々避けそこなった私の薄皮や肉を切り裂いていく。

だがこの程度の傷なら直ぐに再生が出来る。

そして私が放つ魔力を込めた打撃も槍の柄で受け止められる。

時々受け損なった打撃や爪が騎士の体に入るが、騎士の体には小さな傷が付く程度で殆ど効果がない。単純に強固な物質で出来ているのか、

それとも対物対魔処置でもしているのか検討も付かん。とりあえず分かることと言えば、このままでは埒があかんという事だけだった。

そうこうやっている、今度は小僧が黄槍を構えて私へと向かってくる。そして騎士の攻撃の合間に私へと黄槍で攻撃をしてくる。

私はそうやって二本の朱と黄の槍の連撃を受け続け、それらの特性を観察し続けた。

まず私の障壁を破り傷を負わせた朱槍。最初は普通の槍だったが突

然魔力を帯びて障壁を突破する能力を持った。最初からあいつが持つて居なかつた事を見ると、  
アーティファクトの一種だろう。槍の穂先のみ障壁を貫通する効果をもつ物か。だが、所詮はそれまでだ。傷を負わせるだけなら直ぐに再生すればいい。

そして今小僧が持っている黄槍。あれは囀の一種だろう。そうそう朱槍みたいな効果を持つアーティファクトがあつてたまるか。

と、ここまでの観察で取りあえずの方針は決まる。

まず、あの朱槍の一撃は受ける。左の肩で受けてから、そのまま左手で柄を掴んで受け止める。そして小僧の黄槍をそのまま障壁で受け止めつつ、零距离『こおる大地』で足止め兼攻撃で動きを止める。その後は煮るなり焼くなりバラバラに解体するなり遣りたい放題だ……見てろ、小僧めえ……。

S I D E    ルクス

こちらの準備は整った。あちら側もこつちの武器の特性に気付いて  
いるようだ。朱槍には障壁貫通効果、黄槍は囀の様なものでも思

っているのだろう。

現に彼女は朱槍に対して回避行動を取り、黄槍にのみ障壁にて防御を行っている。

そう、それでいい。

僕は彼女に対してエアストとの同時攻撃を行うことにした。僕はエアストに目配せをする。エアストはそのまま僕の動きに合わせるように彼女に突撃をする。

そして彼女に双槍での同時突きを放つ。彼女は左肩で朱槍を受け、そのまま左手で柄を掴かみ取った。そして僕の黄槍の前に障壁を張る。

よし、予測どおりだ。

僕は黄槍の軌道は変えず、そのまま更に魔術行使をする。

「概念付与、コンセプト障壁貫通」ペネトレーション

黄槍に纏うように魔力が集う。黄槍はそのまま彼女の張った障壁に接触し、貫通する。

彼女はその光景を見て目を見開くが時すでに遅し。

朱槍をその身で受け掴んでいる彼女には黄槍を避ける術はない。だが直ぐに傷を塞いで仕切りなおす事が可能だ。

だからその優位性を多少揺るがせてもらおう。

僕は黄槍の穂先が彼女の体に触れるその瞬間、黄槍の真名を開放した。

ゲイ・ボウ  
必滅の黄薔薇！！

黄槍は魔力を帯て彼女の脇腹を穿つ。

僕はそれを確認して直ぐに槍を引き抜き後ろへと下がる。それと同時にエアストが朱槍を捻って彼女から無理矢理に引き剥がして後退する。

彼女はその衝撃で尻餅を付く様に後ろへ突き飛ばされる。

彼女は直ぐに起き上がるが、自らの肉体の異変に驚愕していた。

「な、なんだ・・・これは・・・？」

彼女は黄槍によって貫かれた脇腹を探る。流血と槍による刺し傷が残っていた。

S I D E    エヴァンジェリン

「な、なんだ・・・これは・・・？」

私は黄槍に指された脇腹を探る。そこには未だに流血と刺し傷があった。

そんなバカな。私は直ちに再生を行ったんだぞ？その証拠に朱槍による左肩の傷は既に再生している。血の一滴も流れては居ない。だがどうしてこの脇腹の傷は塞がらない、流血も止まらない、一体これはどういうことなんだ！

「何だ、何なんだそれは、その槍は、・・・答えるおお！！」

私は小僧に向かって声を荒げる。例えさつき小僧が言ったように戦いの最中に敵に手の内は明かさないと分かっているても

こんな事は信じられなかったから。

私の声が空しく木霊する。それが止むと同時に小僧が口を開いた。

「この黄槍の名は『必滅ゲイ・ボウの黄薔薇』そしてこの朱槍の名は『破邪ゲイ・の紅薔薇』貴女程の方なら、これ等が何なのかわかるでしょう?」

小僧は口元に余裕な笑みを浮かべながら私にそう言い放つ。……目は全く笑っていないが、……。だが。

ゲイ・ジャルグとゲイ・ボウだと? フェニアンサイクルのファイアナ騎士団の一員、ディルムツド・オディナの持つ二本の魔槍を何故この小僧が持っている?

あれは本当にあの魔槍だということのか? だとしたらこの傷の説明も付く。

「ゲイ・ボウ、その槍で付けられた傷は、槍を破壊するか、使い手が死なない限り癒えることがない。そう記憶している。」

私はそう言うってから小僧に目を向ける。すると小僧は嘲笑するかの様に返答する。

「ええ、そうです。やはり貴女の知識は僕にとって必要なものですね。どうでしょうか? もうそろそろやめにしませんか? 元々、僕の実力を見ると言う名目での戦いでしたし。これ以上の争いはお互い損耗するだけですよ?」

そう言ってくる小僧の提案に返事するように、私は小僧に向かって魔法の射手を放った。

だがそれは一本残らず小僧と人形によって打ち払われる。

「まだ、やるんですか？」

「当たり前だ、此処までコケにされておいて今更引き下がるものか。」

「そうですね、残念です。」

小僧はそう言いながら溜息を零す。

私は懐から液体の入った小瓶を取り出し、中身を一気に飲み干す。小僧はその様子を邪魔する訳でも無く観察していた。

私は空になった小瓶を地面に投げ捨てから言い放つ。

「この薬は特別性でな、本の少しの間だが私の魔力を全盛期の半分ほどに高めるものだ。まあ、色々と制約があつてここでもしか使えんし色々副作用もあるがな。……」

小僧、褒めてやろう。私に本気を出させたことを、そして呪うがい。私を本気にさせた事を……な。」

私はそう言ってから自分の脇腹の傷の周辺を自らの爪で引き千切る。呪いの傷が消えたことにより私の肉体は瞬時に再生を始める。

「さあ、小僧。本当のテストを始めてやる。」

そうとだけ言い放って、私は小僧へと飛び掛った。

## 第十八話（後書き）

エヴァもルクスもかなり慢心してる感溢れています。

色々ところ都合展開入ってますが、気にしないでくれるととても嬉しいです。

## 第十九話（前書き）

分けて書いたので内容が支離滅裂になっている箇所があります。

## 第十九話

### 第十九話

S I D E  
ルクス

何て魔力でしょうか、これが吸血鬼の真祖の力ですか……。これでも全盛期の半分程度だなんて、正直見くびってましたよ。

今はエアストとの連携で何とか凌いでますがいつまで持つか……。

「はっはっは！ほらほらどうした！受け手に回っては私に勝てんぞ！！」

エヴァンジェリンさんは魔力を込めた爪を縦横無尽に振るう。

「どつだ！これが闇の福音と呼ばれた我が力だ！！」

この女、ノリノリである。

「はいはい、貴女が凄いののは分かってますって。今戦いながら次の手を考えてるところなんですって。ちよっとは黙っててくれませんか？ロリ婆。」

「ムキイイイイイイ！殺す！絶対殺す！！」

「あ、すみません。つい思ってた事が。」

「ついじゃないだろ！お前絶対わざとだろ！！？」

ついつつかり本音を言ってしまうのは僕の悪い癖です。

「と、遊びはここまでにしときましようか！！」

それと同時に僕は魔力を解放する。

「やっぱりわざとかああああ！！」

「『つい』って言ってるでしょうが！！」

僕はそう言いながら障壁貫通概念を付与した必滅ゲイ・ボウの黄薔薇で突く。

彼女はその穂先を寸前で交わし、魔力を込めた拳を放つ。

「くっ！！」

僕はその拳を槍の柄で受け止める。だが

バキィ！

その拳に込められた魔力に耐えられず槍は真つ二つに折れて消える。

僕は無手状態になった。

「しまっ!?!」

彼女はその隙を逃さずにそのまま肘を打ち込んでくる。

投影する隙は無い、僕は仕方なく左腕に魔力を流し込んで強化する。

互いに魔力を込めた肘同士がぶつかり合い、互いにダメージを受けて互いに後ずさる。

そして互いに次撃を叩き込み合いたい所だが、僕の体のダメージの方が大きかった。

僕は右手で左腕を庇う様にして更に後ずさった。

僕が居たところに彼女の腕が空振る。だが直ぐに後ろに下がった僕のほうに迫ってくる。

「逃がすか!!こおる大地!!」

僕の体の回りに氷柱が突き出し、退路を立たれると同時に行動を阻害される。

「なっ、無詠唱!?!」

足の一部が氷柱で固められて動かせない。彼女の右手に魔力が集うのが分かる。

「散れ！小僧！！」

彼女の魔力の籠った拳が目前に迫る。

「エアスト！！」

その拳を寸前でエアストが掴み取る。

「ちっ、木偶風情が！」

彼女はエアストに拳を掴まれたまま、エアストの体に打撃を打ち込む。

鈍い打撃音が響き、エアストの体が揺れている。僕はその間に氷柱を破壊して彼女等から間を空ける。

そして僕はエアストの後方からエヴァンジェリンさんに指を向けた。

「ガンド！」

僕の指先から黒い魔力の塊が射出され、エヴァンジェリンさんに着弾する。

「ほう、魔法の射手か？だが見たこと無いタイプだな。しかも無詠唱か。」

余り効果が無いみたいだ。エアストと取っ組み合いをしてるにも関わらず余裕そうだ。なら・・・

僕は右腕の魔術刻印を解放する。

「刻印起動、一番から七番開放……。」

指先から肘にかけての刻印が駆動する。大量の魔力が溢れだす。そして……

「コンセントレート  
魔力集束」

刻印として封じた大量の魔力を指先に集束させる。そしてエヴァンジェリンさんに向ける。

「エアスト、彼女を全力で殴り飛ばせ！」

エアストはそれに答えるように腕を振り上げ、彼女の体にストレットを叩き込む。

「ぐお！？だがあ！！」

彼女は殴り飛ばされる瞬間、足掻く様に爪を下から上に振るう。そしてその爪はしっかりとエアストの腕の肘から先を捉え、斬り飛ばした。

「良くやったエアスト、直ぐに下がれ！」

エアストはすぐさま僕の元まで跳ぶ。そしてエアストが横に付き彼女が体制を立て直す前に、

「ガンド」

凝縮された魔力が光線となって彼女を襲う。

「何っ！」

彼女は地面に半ばしゃがみ込んだ状態で障壁を張る。

だが光線はその障壁を撃ち砕き、炸裂する。

「ぬぐおおおおおおお！！！！？」

今度は多少効果があったようだ。なら……

「次弾装填、刻印半開放……」

僕は腕を前に突き出して彼女に向けて指を広げる。

「魔力集束、一斉掃射！！！！」

先ほどの光線が各指先、計十本が彼女へと放たれた。

放射状に広げられた光線は何本かは彼女に全く当たらずに広場の床や宙を走り、柱や床を破壊する。

そして残りは着弾し、広範囲に炸裂する。

「……………やったか？」

あたりは砂埃が立ち上がり彼女の姿を視認出来ない。

だが確かにそこに居るのは分かる。その時だった。

「……………の精……………従え……………け」

彼女の姿を確認する。着弾点より少し後ろに下がって詠唱を行っていた。

「……………の冰雪、闇の吹雪。」

まずいな、今から防御して間に合うか？まあ、エアスト自体の対魔力と護符があれば……………

「術式固定」

え？

本来なら放出されるべき魔力を空間に固定している……………何故だ……………？

「掌握」

な！？あれだけの魔力の塊を握り潰した！？いや、吸収したのか？  
それと同時にエヴァンジェリンさんの体から強力な魔力の波動が迸る。

「さあ行くぞ小僧、いやルクス・アヴェエスター。」

彼女の全身を黒い魔力が覆っている。これが例の禁呪、マギア・エレベア闇の魔法か・  
。。。

S I D E    エヴァンジェリン

いやはや、恍けた奴かと思いきや中々やるじゃないかコイツは。

私を此処まで追い詰めてくれるとはな。

だがここからが私の真髄だ。マギア・エレベア我が闇の魔法、存分に味わうがいい。

「さあ行くぞ小僧、いやルクス・アヴェスター。」

私はルクスへと向けて瞬動する。そして魔力を込めた拳を打ち込む。それを奴は寸前で大きく避けて

私から距離を取る。そして主を守るかのように片腕を？がれた人形ゲイ・ジャルグが破邪の紅薔薇を持って前に出てくる。

「ほう、そんなにボロボロになっても未だに主を守るとは中々の忠誠心だな、木偶。だがな・・・」

片腕で大きく振られる朱槍をかわして私は人形の懐に入る。

「お前では私の相手は出来ん。足止め程度にはなるがな。」

人形は懐に入ってきた私に目を向け、急いで距離を取ろうとする。だがもう遅い。

エンシス・エクセクエンズ  
「断罪の剣」

人形は胸の下辺りから真っ二つに  
とは行かんが胸部の  
表面が削げ落ち、その場に膝をついた。

「硬いな。だがこれで終わりだ・・・。」

私は断罪の剣を振り上げ、そのまま人形の頭へ振り下ろした、が。

「白刃取り！？バカな、魔力の刃だぞ！？」

頭部を含む全身を隙間無く鎧で覆ったルクスに断罪の剣を受け止められる。  
エンシス・エクセクエンス

「一か八かでやって見たんですけど、いけますね!!」

ルクスは両手で挟んだまま魔力の刃を押し折った。

そして間髪いれずに私にいつの間にか手にしていた朱槍を突き立てる。

再び障壁を貫通した朱槍は私の体に刺さると思いきや、私の体を後方へ大きく弾き飛ばす。

「くっ、障壁を貫通したり弾き飛ばしたり、一体何なんだ!？」

私は愚痴りながら体勢を立て直す。その間にルクスは人形に肩を貸して広場の隅に下がっていく。

「ふっ、人形など捨て置けばいいものを・・・」

私は飛翔して奴等を追う。

「敵に背を向けるとはな、終わりだ!! 氷神の戦鎚!!」



「クラウ・ソラス  
赫灼たる焰!!!」

刀身は煌く熱線となり氷塊へと放たれる。

氷塊は熱線を浴び、瞬く間に欠片一つ残さず消失する。

その光景を見て彼女の顔に驚愕の色が窺える。そして僕は剣を一旦消し、彼女を見上げた。

「あれ程の氷塊を一瞬で消し去るとは、それも名のある剣か？」

「そんな事はどうだっていいでしょう？悪いですけど、そろそろ終わらせて貰いますよ。」

エアストの損傷が大きすぎる。それにこれ以上は本気でやばい。

出し惜しみは無しだ。全力で行かせて貰う

僕は全身の魔術回路を全て起動させ、予め右手の中指に嵌めていた指輪に魔力を流し込む。

指輪に魔力が回りだす、そしてそれと同時に僕の体に異変が置き始

める。

「がつ、ぐう……。」

割れんばかりの猛烈な頭痛、そして眼底からの出血。ヘルム兜を被っているから彼女から此方の異変は殆ど分らないだろう。

だが、徐々に膨れ上がる魔力の胎動に彼女は気付いているだろう。

彼女が空を蹴り、此方へと飛び掛ってくる。

彼女の手には先ほどの剣が宿っている。

このまま数瞬後には僕はその刃にかかって裁断されるだろう。

だけど、それじゃあ遅すぎる

。

第十九話（後書き）

次も続きます。

お付き合いをお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1113y/>

---

魔法先生ネギま～悪の正義～

2012年1月6日19時46分発行